

いしかり曆第十一号

石狩町郷土研究会

澄月園池菱

清雅帖

石狩尚古社連句集

解説 前川道寛
校注 窪田薫・田中實

清雅帖

石狩尚古社連句集

例言

- 1 本書は石狩尚古社二代目社主鎌田池菱が残した句帖「清雅帖」に収録されたものを中心に解説したものである。
- 2 解説は石狩町郷土研究会顧問前川道寛が行い、校注は窪田薫・田中實がおこなった。
- 3 題名については、窪田が原文に題のついていないものは「」内に発句の上五を入れ、仮題とした。
- 4 各句の上に付した算用数字は句の順序を示す。
- 5 ㊦、㊧、ウ（初折裏の略号）、ナオ（名残表の略号）、ナウ（名残裏の略号）で窪田が付した。
- 6 漢字の右側につけた契沖仮名遣による振仮名、濁点、有季の句の下につけた括弧内の季名などは、原文にないが窪田が書入れた。
- 7 本書の編集・レイアウト・写真撮影は石橋孝夫、校正は石橋孝夫・田中實が担当した。

目次

発刊にあたって 石狩町郷土研究会々長

一 尚古社と鎌田池菱	田中 實	2
二 俳人略歴	田中 實	3
三 連歌・俳諧・連句	田中 實	4
	窪田 薫	8

四 清雅帖解説…………… 11

① 清水の巻	明治三十五年八月～十二月	池菱、大道	12
② 初秋の巻	明治三十五年八月～十二月	大道、池菱	14
③ 「鶴の脛」の巻	明治三十五年十二月	大道、池菱	16
④ 時鳥の巻	明治三十五年十二月	池菱、大道	18
⑤ 花の山の巻	明治三十六年一月	池菱、露焦	20
⑥ 「路の臺」の巻	明治三十六年一月	池菱、痴楽	22
⑦ 「焚拾た」の巻	明治三十六年一月十五日	痴楽、池菱	24
⑧ 「臙冷に」の巻	明治三十六年三月十八日	池菱、痴楽	26
⑨ 「山に山」の巻	明治三十六年三月十八日	痴楽、池菱	28
⑩ 「数積めば」の巻	明治三十六年四月	池菱、桃雫	30
⑪ 俳諧新派の巻	明治三十六年四月～五月十日	池菱、痴楽、桃雫	32
⑫ 「夕立や」の巻	明治三十六年五月十日～六月十四日	露焦、痴楽、池菱	34
⑬ 「足跡」の巻	明治三十九年夏	雷庵、池菱	36
⑭ 「引返せ」の巻	明治三十九年夏	雷庵、池菱	38
⑮ 「山は晴れ」の巻	明治四十年九月～十一月十六日	娛水、池菱	40

⑯ 鶯の巻 明治四十年九月～十一月十六日

⑰ 「夕さりや」の巻 明治四十二年 閑窓、池菱 42

⑱ 「里近き」の巻 明治四十一年八月十一日 池菱、かつミ 44

⑲ 「活かされて」の巻 明治四十一年八月～明治四十二年五月 秋香、池菱、かつミ 46

⑳ 「蓮咲や」の巻 明治四十年十一月 池菱、娛水 48

㉑ 雪の巻 明治四十年十一月六日～明治四十一年五月 娛水、池菱 50

㉒ 「魚の住む」の巻 明治四十一年十月 池菱、閑窓 52

㉓ 若竹の巻 明治四十二年四月～五月 旭風、池菱 54

㉔ 時鳥の巻 明治四十二年四月～五月 池菱、旭風 56

㉕ 「千日の苦」の巻 大正十五年十二月 錦風、池菱 58

㉖ 「窓の日」の巻 大正十五年五月 膝六、池菱 60

㉗ 雑煮の巻 昭和五年一月 秋香、池菱 62

五 清雅帖外解説…………… 64

㉘ 歌仙「剃刀を」の巻 明治三十二年夏 採花、對儿、池菱 66

㉙ 大學之連歌…………… 70

㉚ 「扇」の巻…………… 73

㉛ 「牡丹」の巻…………… 74

㉜ 鯉鱗行「大根之花」の巻…………… 76

㉝ 脇起鯉鱗行「梅が香に」の巻…………… 78

あとがき…………… 79

前川道寛…………… 79

発刊にあたって

石狩町郷土研究会は、平成七年発行の『鎌田池菱と尚古社—中鳥家資料にみる石狩俳壇と各地の俳人たち』に引き続き、今、尚古社々主鎌田池菱の連俳手控「清雅帖」を発行する。現在の道俳壇風潮のなかでは異色の俳書であろう。惟うに連俳が正岡子規の一文により文学上の価値を否定されてから幾久しい。

武田櫻桃四郎は、編著書の『俳壇辭典』（明治四十二年発行）のなかで次のように記している。

「連俳の文学上の価値はどうかと考へて見ると、殆ど零である。是は子規氏、鳴雪翁なども喝破して居られるし、亦俳壇を通じての説らしい。もつとも、先年高濱虚子氏が是等子規、鳴雪両氏の説に反対して、文学上の価値を辨ぜられたが、要するに其れも価値と云う上から見ては辨護に過ぎぬものとか見られなかつた。（中略）其處で、何故連俳は文学上の価値に乏しいかと云ふと、一卷を通じて統一した思想が表現されて居ないからである。連俳には、前の句と後の句と一句の關係はあるが、思想が前後一貫して居ない。初めから座興のやうに出来て居るから、一貫した思想を謳ふのでは面白くない。そこで、変化を求めるために色々の錯雑した工夫が起つて、結局此のやうなものとなつたのだろうか、思想に纏りが無いと云ふ條件の下に其価値は否定せられたのである。」と。

子規から起つた新派と呼ばれる俳風に追従、そして、連俳を本位とした芭蕉をも批判しているが、この記述は当時の俳人の心情があらさまに表されていて興味深い。

新派隆盛に反比例して衰退し、俳壇の片隅に閉塞されてきた連俳が、昭和中期に詩人や文人に注目され、俳壇に及んでいま静か

な広がりを見せている。ともあれ、古きを学び座の連衆と俳雅に遊んだ石狩尚古社員の連俳資料の発行が、石狩町文学史にさらなる厚みと重みを加えたことを喜ぶ。

「清雅帖」の解説にご執念を賭けられた先達会員前川道寛老師、発行の意義を多として校訂、注釈、玉稿と重々のご盡力を傾注下さった窪田薫先生、写真撮影・編集事務にあつた石橋孝夫会員、資料提供者中鳥勝久会員並びにご指導を賜つた各位に深く敬意と謝意を表する。

平成八年三月吉日

石狩町郷土研究会々長 田中 實

一 尚古社と鎌田池菱

田中 實

石狩尚古社は江戸時代末期の安政年間に創始された。その主唱者は、石狩鮭場所の請負人であった村山金四郎（排号嘯月）、勇拂出稼ぎ人名儀で村山家の鮭場所を経営し、本陣取扱い人も務めた十代山田文右衛門（排号陽山）、幕府箱館奉行所石狩詰所の足軽龜谷丑太郎（排号桂香）、同御用処帳場番人の増川菊次郎（排号溪鶯）などである。

明治維新後も引続いて石狩に居住した山田、龜谷、増川に、鮭漁業家の井尻靜藏（排号淇水）、同家支配人加藤円八（排号有隣）、元水沢藩士で樺太アイヌ授産教師の高橋浪華（排号月耕）ならびに地元有力商人の社員によって尚古社の活動は活発となり、これに山田得兵衛（排号露蕉）、村山・井尻両家の支配人藤田利兵衛（排号以孝）、医師・郵便局長の富田安宅（排号石江）などが加わって、活動は地元の石狩から道内外にまで及び、尚古社は道央俳壇の拠点となった。

明治二十五年発行の『山田露蕉古稀之賀句集』（東京で印刷・出版）の全道的な出句者。同三十五年の『尚古集』の道内各地はもとより、本州、沖繩に至る応募者の広範囲さと、三千五百三十八句の選句数、道内外の選者十三名という豪華さが之を証している。

同三十六年に渡辺永助（排号人也）が石狩小学校々長として着任し尚古社に加わったことから尚古社に新しい息吹が流れ込んだ。同四十四年、初代社主以孝の『尚古社主還曆祝吟集』が発刊されたが、出句者は社員のほか道内各地から九十四名に及んだ。道外の選者は花之本聴秋、指頭庵耕雨、其角堂機一、星野麥人、聴

雨窓竹冷、楽天居小波そして久留米に在った牛島藤六であった。

大正期に入ってから、藤六、青木郭公、小笠原洋々、出口叱牛など道俳壇で活躍した新傾向の俳人とも交流を強めた。末期には石狩町長坂牛祐直（排号瓢齋）、石狩病院長鈴木信三（排号弦月）を加え、鎌田池菱が社主として、二十余名の社員で昭和十年代まで活動を続けた。

幕末期から昭和十年代までの約一世紀、石狩文学の原点、中心は尚古社の俳句活動であった。それはまた、鮭に明け鮭に暮れた石狩一世紀の興亡史に通ずる。

尚古社二代社主鎌田池菱（本名幹六）は万延元（一八六〇）年、現在の新潟県佐渡郡畑野町に生まれ、十代半ばで出国し渡道して石狩の①中島呉服店に勤め、のち主人吾作の没後、その妻の後添えとなり、分家して②中島商店を開業し呉服太物米穀学校用具並びに和洋小間物、国定教科書売捌きなどを商う大店とした。しかし、入籍することもなく、営業主にもならず、公職にもつくことはなかった。

そして、幼年時から親しんできた俳諧に精進し尚古社の物心両面にわたる運営に活躍した。大正十三年に二代目社主に就任、昭和十一年七十六才で没するまで務めた。排号は池菱（池蓼）、別号は東園、澄月園、尚古院。池菱は北海道俳壇の重鎮として知られたほか、中央俳壇及び本州各地方俳壇との交流が広く、新旧派の俳人と風交し、また多くの俳誌に出句した。

尚古社資料館は、三代目勝人と四代目勝久が私費をもつて自宅隣に建築し、平成元年に開館した私設資料館である。池菱の遺品を主とした収蔵展示品は、尚古社関係資料各種、風交収集した五百点を越える短冊、書画など多種多様にわたり、いわゆる旧派俳諧関係資料の宝庫であり、道内外の参観者が感嘆して止まないほ

どである。池菱の子、亀藏・孫武史はともに町収入役を務めた。

一一 俳人略歴

田中 實

大道・本名萩原泰能（文政十一年～明治四十二年）

江戸神楽坂生まれ。幼時、学を江戸の宗参寺住職曹隆和尚に受け、二十二才剃髪して奥州に下る。幕府箱館奉行所石狩役所の荒井金助調役の勧誘で、文久元年（一八六一）、現在の厚田村古澤に移り同地に竜沢寺を開いた。明治二十年（一八八七）に還俗して神道の教導職となりのち郷社八幡神社々掌、厚田外六カ村社の社司を務めた。

別号は龍洞舎、厚田村の「正風社」の指導者でもあり、尚古社の和歌や俳句も指導した。享年八十二才。

痴楽・本名成田銚吉（安政三年～不詳）

別号無学庵。石狩町大字八幡町に住まいし、明治末期小樽に転居。尚古社々員。

露蕉・本名山田得兵衛（文政六年～明治四十一年）

松前（福山）生まれ。幼少から俳諧の道に入り、明治十二年に尚古社々員の増川菊次郎（俳号溪鶯）の招きで小樽郡勝納町から石狩に転住した。同二十五年（一八九二）に『山田露蕉古稀之賀句集』を東京で発刊した。また、函館の俳人、孤独堂無外と親交があった。尚古社の指導者格。享年八十四才。

桃亭 調査中

雷庵・本名矢嶋文治郎（明治十二年～大正八年）

情歌号は通喃子。明治三十九年小樽から石狩に転住し尚古社で活躍した。代書業。

娛水 本名は調査中

別号此水観。明治三十二年には北海道毎日新聞の俳句選者を務めていた。当時の住所は越前（現福井県）、のち小樽に住まいし小樽「白露会」の選者となった。また、「札幌吟社」で活躍し札幌に転居した。生没年不詳。

閑窓・本名荒井清三郎（嘉永五年～大正十四年）

別号對案亭、白藤舎、養志堂、不染居士。現群馬県館林生まれ。織物業。俳諧を初めて見佐に学び没後下平可都三に師事して連句の大家と言われた。

森山鳳羽、瀬川露城、渡辺葵文、大主耕雨ら多くの名俳人と交流して数多くの連句巻を残している。享年七十四才。遺句集『知々集』。

可都三（かつみ）・本名下平雅能（文政五年～明治四十三年）

現群馬県鳥瀨村水沼の名主の家に生まれる。俳諧を久米逸瀨に師事。武芸も達者であった。名主、戸長を務めた後、俳諧師として名声を高め、明治中期頃の評価では伊勢の大主耕雨、三河岡崎の植田石芝と並んで日本三俳人と称されたこともあったという。明治末期の典型的な行脚俳諧師で、遊歴は奥州、信州、北陸、関東、山陽・九州の各地方に及んだ。

秋香・本姓茂木（年齢不詳／昭和十六年）

別号蝶園。俳諧を小川尋香、下平可都三に学ぶ。大正、昭和期の尚古社選者を務めた。昭和四年の住所は武蔵国大里郡大崎村となつている。とくに俳画、連句に長じていた。

旭風・本名旭太作（慶応三年／大正九年）

別号巒雪庵。福井県勝山町生まれ。小樽に住まいし、明治二十二年に小樽「陽会」を結成し会長となる。同年俳誌「薫風」を発売し大正九年まで続ける。俳諧は五世夜雪庵宗匠より立机。享年五十四才。

錦風・本名平田金治（慶応二年／没年は調査中）

俳号勝荘庵錦風。別号梅の家かおる。江戸本所緑町生まれ。米穀商で水車業を兼営。明治二十五年（一八九二）北海道岩内町に移住し醤油醸造業を営む。大正五年小樽区色内町に転住し、米穀委託販売業を開業。同七年東京に転居。

俳諧は三世夜荘庵宗匠、五世東杵庵葛斎宗匠に師事、連句の大家と称せられた。岩内に交友会を結成。大正七年に錦風が編さん長男晋風が校訂の『風交録』には道内の俳人四百二十余名が掲載されている。

大正十三年に、尚古社の選者として東京勝荘庵宗匠選とある。

膝六・本名牛島虎之助（明治五年／昭和二十七年）

佐賀県生まれ。同二十四年屯田兵として上川永山兵村に入地。同三十年鉄道会社に就職後、自営、道庁吏員を経て満州に渡り、終戦後引揚げて函館に住まいする。俳句は中学在学中にはじめ河東碧梧桐、内藤鳴雪に師事。渡道後は、白雪吟社、北星吟社を創

り句誌を発行したが長続きしなかった。のち白田垂浪の「石楠」創刊などに刺激され、札幌で「時雨」を創刊し本道俳句界の一大勢力に至った。「時雨」の発行は遅刊休刊の連続であったが、大正十五年から昭和六年、長谷部虎杖子らの編集担当により復刊し本道の代表俳誌となった。膝六は渡満後の昭和十二年に「時雨」を退陣したので、虎杖子らが引継ぎ「葦牙」と改題し継承されて今日に至っている。帯広の五男典義宅で没。享年八十才。

『牛島膝六句集』は昭和五十二年、葦牙主宰の山岸巨狼編で遺句集として発刊された。膝六は時々石狩に来て句会を開催し、尚古社員の指導にも当つた。

採花・佐藤いち（天保十四年？／明治三十四年）

女流俳人の奇傑、俳諧を春湖に学ぶ。のち郷里の信州佐久郡塩名田に帰った。享年五十八才。著書に連句集『穂あかり』、『こればかり』、『歳旦帖』がある。

對凡・本名大山理兵衛（生没年不詳）

別号盧庵。小築庵春湖の高弟。小樽に居住。『尚古集』の選者の一人。

尚古社々員

以孝・本名藤田利兵衛（嘉永四年／大正十二年）

村山・井尻両漁業家の支配人。尚古社社長、町総代人等を務めた。小樽で没。

江雪・本名高橋儀兵衛（嘉永六年／大正十年）

官設の石狩罐詰所の払下げを受け経営主となる。町会議員を務

めた。

石江・富田安宅（天保六年～没年不詳）

伊達邦直主従の当別移住に加わり渡道し石狩詰となる。医者、石狩郵便局長、質業。尚古社幹事、のち当別に転任。

若水・本名畠山清太郎（元治元年～明治四十五年）

石狩生まれ。漁業、荒物商、酒造業、町総代人、石狩水産組合長等を経て明治四十二年に第二代石狩町長を務める。

西吏・本名上野正（弘化三年～明治四十五年）

薩摩国生まれ。士族。開拓使官吏から樺太アイヌ共救組合長となる。町総代人、漁業。のち札幌に転住し区会議員、鹿児島で没。

静里・本名岡村静雄（嘉永元年～大正十一年）

鳥取生まれ。神職・教職に就き渡道し、札幌神社神職、明治二十年石狩八幡神社社司に就任。国学の造詣深く、詩歌にも勝れた。

戸方・本名中島房蔵（明治三年～大正十二年）

中島商店二代目。呉服・太物、雑貨販売業。町総代人、町会議員。のち小樽に転住。

松僊・本名飯尾圓蔵（安政元年～昭和八年）

能登国生まれ。高田・久留米の小学校長等を経て明治二十四年渡道。小樽量徳寺院代から翌年石狩の能量寺住職として来町。公私に盡した。

柳蛙・本名井上傳蔵（安政元年～大正七年）

武蔵国秩父下吉田村生まれ。明治十七年秩父自由困民党の会計長。秩父事件後潜伏、欠席裁判で死刑を宣告される。同二十一年頃石狩に来る。伊藤房次郎の偽名で土地の貸付を受けた。小間物文具店。明治末期札幌に移り、のち野付牛（北見市）で没。

桂舟・本名加藤一魯（文久三年～没年不詳）

公吏。石狩郡親船町外九町三村戸長。石狩町花川村組合役場組合長。尚古社幹事。

桃下・本名中島源五郎（元治元年～没年不詳）

福島県梁川町生まれ。士族。石狩郡生振村小学校校長、石狩町花川村組合役場収入役。のち石狩を去る。大正七年の住所は勇仏郡鷓川町。

蟻卵・本姓澤田

苔石・本姓富塚

幾石・本名高橋一精

露光・本名田中伊勢治（天保三年～明治三十九年）

陸中大植村生まれ。明治二十年石狩に来る。種物商、雑穀商。

興信・本名馬場興信（明治七年～昭和十八年）

石狩町法性寺の住職。

黄樹・本名横山順倫（安政五年～大正十四年）

江戸浅草生まれ。幕府勘定役横山順光の二男。青森県庁、逓信省を経て明治三十二年石狩郵便局長として石狩に来る。町会議員も務める。能書家（書号城北）で篆刻、写真術の心得もある。のち石狩を去り名古屋で没する。

蛾仙・東洋・拜山・樂山・栄の本名、経歴等については調査中。
参考文献

中島勝久 平成七年 『鎌田池菱と尚古社』 石狩町郷土研究会

連歌・俳諧・連句

窪田 薫

獨創性に乏しいとよく批判される日本文化が、逆に、その獨自性・藝術性・前衛性を諸外国から賞賛羨望されてゐるのが、連歌・俳諧・連句である。中世・近世・現代と、時代によって呼び名が変わつてゐるが、次の三點の特徴は通時的に共有してゐる。

(一) 五七五の長句と七七の短句を交互に連ね四季・月花・恋・人事等を詠み進めてゆく一種の古典的(定型詩)である。

(二) 複数の作者である連衆が集まり、指導者司会者進行係である宗匠の捌きの下で、右の様な定型詩を共同製作する(座の文藝)である。

(三) 式目といわれる一定の約束・ルールに従い(言語ゲーム)である。関白二條良基が一三七二年に制定した「應安新式」が連歌式目の原典として尊重された。諸種の俳諧式目はこれを簡約したものである。

連歌の源流を溯ると、中国南部・ベトナム・韓国・日本列島にわたる照葉樹林文化圏で行われている歌掛け・掛け合いに辿りつく。記紀や万葉の歌垣・姫歌(かがい)にその姿をとどめ、現在でも地方によつては、盆踊りなどの時に掛け合い唄の歌はれる所がある。

鎌倉・室町・戦国と乱世を通じて、優雅幽玄の連歌は、支配的な文学であった。式目が尊重され、ルールのある文藝といふ特徴は銘記されて然るべきである。

連歌の用語は、優雅なヤマトコトバの歌語に限られてゐたが、俗語・卑語・漢語など俳言を用いる俳諧之連歌、略して、俳諧は、近世・江戸時代の支配的な庶民の文藝であった。俳諧を高尚な芸

術に洗練したのは松尾芭蕉であつた。

中世の連歌では百行の(百韻)が標準とされたが、俳諧では、芭蕉の愛好した三十六行の歌仙(一名・鯉鱗行)がスタンダードとされる。懐紙二枚からなる歌仙の構成を表示すると……

初折(一の折) 初表 表六句
初裏 裏十二句

名残折(二の折) 名残表 十二句
名残裏 六句

俳諧の最初の第一句、發句(立句)は、挨拶・即興・属目の句で、当季の季語と「や」「かな」等の切字を入れる。「や」「かな」は發句にだけ用い、他の句に使つてはならないとされてゐる。二句目(脇)は、發句と同時に同場で同季の季語を入れる。漢字留が好ましいとされる。

發句と脇は、「實」の世界を詠むが、第三から「轉じ」が始まり、四句以後の平句は「虚實」入り交じり、花月・恋・森羅万象と、一行づつ一歩づつ新しい世界が開かれてゆく。これを芭蕉は「ゆきて帰らぬ心」と説いている。

表六句には、神祇・釈教・恋・無常・怀旧・軍事・怪奇・病体・地名人名等固有名詞・花などは詠んではいけないといふ禁忌がある。但し發句は例外で、何を歌つてもよい。

構造的には俳諧は、季語を含む有季の雑の句群と「縞」を作つてゐる。春・秋はそれぞれ三乃至五句、夏・冬はそれぞれ一乃至三句続ける。恋は一句で捨てず、普通二句、五句迄續けてよい。恋は一卷中、最低二個所は入れること。季を移すときは原則として間に雑(無季)の句を夾む。例外的に直接他句へ続く場合は「季移り」という。

Monthを賞詠の月、Monthを月次の月といひ、月の座になるのは賞詠の月である。月の座は、各面へ初表・初裏・名残表へ一個づつ計三個配置される。

花の座は、各折に一個づつ計二個。花の座に使われる花は「正花」といひ、桜のみに限定されず、賞美に値する花やかさの精髓で、「花」といふ文字を必ず使用すること。

俳諧の基本となる最小單位は、「三句の渡り」である。

- (n-2) 句目 打越 うちこし A
- (n-1) 句目 前句 まえく B
- (n-0) 句目 付句 つけく C

付句は前句には「付き」、打越から「轉じ」なければならぬ。

「付け」と「轉じ」の合力を「もどき」といふ。

「付け」には目はゆくが、「轉じ」はおろそかになり易い。付句は常に打越と異質でなければならぬ。即ち、

- (1) 句の自・他・場・自他半・アシラヒの別。
- (2) 素材・用語。
- (3) 文体。

などが同一・同様・同類・同趣(つまり観音開き)にならないよう、意識的に配慮の事。

立花北枝の『付方自他伝』による句の分類。「自」とは自分、「他」とは他人、「自他半」は自分と他人、「場」とは人間以外の森羅万象を扱った句。「アシラヒ(会釈)」は人間が詠まれているが、自でも他でもない句で、自の句に續けば「自アシラヒ」、他の句に續けば「他アシラヒ」となる。

「ゆきて帰らぬ」変化の詩である俳諧の流体力学のメカニズムを、泰西の文藝批評家の用語を拝借して解説すると次のようになるであらうか。AにBを付け、BにCを付けてゆく。ポール・リクルの「生ききた隠喩」の筆法を借りるなら、Aを解釈してBを創造し、次の作者はBを解釈してCを創造してゆく。この解釈と創造の行程は、ハロルド・ブルームの称へる「創造的誤読」であり、又、ジャック・デリダの提唱した「脱構築」deconstructionとも讀むことができる。此のABCの一セットの中で、AとCとが同趣・同様であるのは「観音開き」と呼ばれ最も落ち入る易いので最も警戒すべきタブーとされる。

AとCとが、様異なる無関係な句であるので、一卷を通した一貫したテーマもストーリーもない。一貫性は拒否され排斥されるのである。この點が、世界文學中に類のない異色の特殊性であり、ドナルド・キーンを始めとする世界中の日本文學研究者達の、注目・賞讃・垂涎的なのである。

俳諧は此の特殊性のために、明治維新以後の文明開化・脱亜入謳・近代合理主義・近代的自我を旗印とする時代の精神パラダイムに合はず、正岡子規の「連俳非文學論」にたたかれて、隠れ切支丹の如く、一時鳴りをひそめてゐた。「俳諧」なる名称も、女中・小使なみの差別的賤称と同情され、へお手伝いさんへ用務員へなみに「連句」と呼ばれるようになった。

時代が変わり、価値感も変わった。

産業革命に連動したモダンから、情報革命に連動したポストモダンになり、その感性・行動様式・考へ方の中で、「連句」は、俳句や短歌や現代詩を追ひ抜いて、最先端最前衛アヴァンギャルド、アヴァンポプスのアートとして浮上してきた。

連句は、ホイジンガやカイヨワの賞揚する「遊び」であり、ヴィットゲンシュタインの称へる「言語ゲーム」の権化であり、ジュリア・クリステヴァの言ふ引用のモザイクとして形成されるテキストであり、ロラン・バルトの言ふ「テキストの快楽」そのものなのである。

平成七年十月五日稿

四
清
雅
帖
解
讀

明治三十五年秋八月起 十二月満尾

清水の巻

魚の住む川には遠き清水哉
若葉そよ／＼四方の見晴
家根替の足代組す差図して
腹透きよしと好む麦飯
月の出る迄と砧を打休み
露つけて研ぐ鋏小刀
新絹の艶を自慢に見てお行
廣東人を真似る云ふり
唯ひとへなれど襖の内と外
隠すほどなを匂ふ釧汁
慰に押し出し筆の市に出る
此界限はみんな湯治場
明け易き夜もゆる／＼と遊ぶ月
肌ざわりさへ秋近き風
鬮引の無尽の金を取外し
長い烟管でいかいおしやべり
花七日杖のへりめも覚えける
早稲より晩稲の伸る苗代
花七日杖のへりめも覚えける
早稲より晩稲の伸る苗代

①清水の巻

- 1 魚の住む川には遠き清水哉 (夏) 池
- 2 若葉そよ／＼四方の見晴 (夏) 大道
- 3 家根替の足代組す差図して (夏)
- 4 腹透きよしと好む麦飯 (秋)
- 5 月の出る迄と砧を打休み (秋)
- 6 露つけて研ぐ鋏小刀 (秋)
- 7 新絹の艶を自慢に見てお行 (秋)
- 8 廣東人を真似る云ふり (冬)
- 9 唯ひとへなれど襖の内と外 (冬)
- 10 隠すほどなを匂ふ釧汁 (冬)
- 11 慰に押し出し筆の市に出る (冬)
- 12 此界限はみんな湯治場 (夏)
- 13 明け易き夜もゆる／＼と遊ぶ月 (夏)
- 14 肌ざわりさへ秋近き風 (夏)
- 15 鬮引の無尽の金を取外し (春)
- 16 長い烟管でいかいおしやべり (春)
- 17 花七日杖のへりめも覚えける (春)
- 18 早稲より晩稲の伸る苗代 (春)

(注) 7新絹 今年の繭から取った新生糸で織った絹。今年絹・新機しんはた。

伏春甲子祭張込
 支村ながら多い歴史
 寄合て鑑を見ては泣くらし
 嗚呼名の高き碑やこれ
 檜笠ぬらす覚悟の初時雨
 甘い〜と誉る風呂吹
 人をかえ品替え嫁を落付せ
 知恵にましたる調法もなし
 御府内を引く玉川は命にて
 轍の跡にふりかゝる雨
 雲散りて流石さやけき亥中月
 樽の新酒をしたみ切るなり
 儲けたは鑑三百で秋くれぬ
 いつも短かき伯楽の裾
 葬棺を牛に曳かす施主好み
 西日奇麗な滋賀の山越
 花咲て吹華休る刀鍛冶
 老も若きも面白き春
 花吹て吹華休る刀鍛冶
 老も若きも面白き春

- 19 此春は甲子祭張込ナウ (春) 道
 - 20 支村ながら多い歴史 (春) 菱
 - 21 寄合て鑑を見ては泣くらし (冬)
 - 22 嗚呼名の高き碑やこれ (冬)
 - 23 檜笠ぬらす覚悟の初時雨 (冬)
 - 24 甘い〜と誉る風呂吹 (冬)
 - 25 人をかえ品替え嫁を落付せ (冬)
 - 26 知恵にましたる調法もなし (冬)
 - 27 御府内を引く玉川は命にて (秋)
 - 28 轍の跡にふりかゝる雨 (秋)
 - 29 雲散りて流石さやけき亥中月 (秋)
 - 30 樽の新酒をしたみ切るなり (秋)
 - 31 儲けたは鑑三百で秋くれぬ (秋)
 - 32 いつも短かき伯楽の裾 (春)
 - 33 葬棺を牛に曳かす施主好み (春)
 - 34 西日奇麗な滋賀の山越 (春)
 - 35 花咲て吹華休る刀鍛冶 (春)
 - 36 老も若きも面白き春 (春)
- (注)
- 19 甲子祭 甲子の日の前夜、子の刻まで起きて居て二股大根・黒豆など供え、大黒天を祭る風習。江戸時代の商家で行はれた。24 風呂吹 厚切の大根や蕪をふつくと茹であげ、練味噌をどろりとかけて食べる。27 御府内 江戸時代に江戸の市域とされた地域。朱引き内。29 亥中月 陰暦二十日の月。30 したみ切る 滴のしたたりを垂らし切る。

明治三十五年秋八月
文音

② 初秋の巻

初秋の眼にさやかなり桐畑
樽となり鏡形り雁の啼つれて
水いろ斗り寂色もなし
布木綿さらし仕舞ば昇る月
膳についても汗はしつとり

人傳手ならでせめて一言
黒髪を思ひ切たる姉妹
嗟峨野の奥の霜と消えぬる
落ちて有る財布拾はぬ旅衣
面目もなき国の右左きく

今年ことしの秋は鮒ふなの沢山
疑うたがふて植うたる稲いねの大おほあたり
長い訴訟しよその示談じだん纏まとる
頓とん而に咲さく花はなも残のこらず質しちう受けて
急いそぐ雛ひな荷にの裏うら川がし岸しにつく

初秋の眼にさやかなり桐畑
樽となり鏡形り雁の啼つれて
水いろ斗り寂色もなし
布木綿さらし仕舞ば昇る月
膳についても汗はしつとり
人傳手ならでせめて一言
黒髪を思ひ切たる姉妹
嗟峨野の奥の霜と消えぬる
落ちて有る財布拾はぬ旅衣
面目もなき国の右左きく
今年ことしの秋は鮒ふなの沢山
疑うたがふて植うたる稲いねの大おほあたり
長い訴訟しよその示談じだん纏まとる
頓とん而に咲さく花はなも残のこらず質しちう受けて
急いそぐ雛ひな荷にの裏うら川がし岸しにつく

明治三十五年秋八月 文音

十二月満尾

- 1 初秋の眼にさやかなり桐畑 (秋) 大道
- 2 樽さかは冷ひやる板いた椽えん (秋) 池菱
- 3 棹さかとなり鏡かみ形かたち雁かりの啼なつれて (秋)
- 4 水みづいろ斗あり寂さび色いろもなし (秋)
- 5 布ぬの木も綿めんさらし仕し舞まば昇ある月つき (夏)
- 6 膳ぜんについても汗あせはしつとり (夏)
- 7 先陣せんちんに拔ひ駢げせむと意いき気き込こんで (冬)
- 8 人傳手ひとづてならでせめて一言ひとこと (冬)
- 9 黒髪くろかみを思おもひ切きたる姉妹あねいも (冬)
- 10 嗟峨野さあがのの奥おくの霜しもと消きえぬる (冬)
- 11 落おちて有ある財布さいふ拾ひろはぬ旅衣たびころも (冬)
- 12 面目めんもくもなき国くにの右左みぎひだりきく (秋)
- 13 約束やくそくの田楽でんがく焼やきも月つきを出だし (秋)
- 14 今年ことしの秋あきは鮒ふなの沢山たぐさん (秋)
- 15 疑うたがふて植うたる稲いねの大おほあたり (秋)
- 16 長い訴訟ながいしよその示談じだん纏まとる (春)
- 17 頓とん而に咲さく花はなも残のこらず質しちう受けて (春)
- 18 急いそぐ雛ひな荷にの裏うら川がし岸しにつく (春)

(注) 左右 あれやこれや。状況。様子。17 頓而 急に。俄に。

着飾て高雄詣の賑かさ
迷子の姪にふいと行逢ふ
道菱

着飾て高雄詣の賑かさ
 迷子の姪にふいと行逢ふ
 道菱
 思ふより易き地震のゆり戻し
 説教済だあと酒盛
 端近く暑いくといさり出て
 海見晴せば風薫るなり
 解きかねる謎に髪髻が逃支度
 飼た鸚鵡に踞れし罪
 昇で来た駕屋も知らぬ最期とや
 夢物語り聞てびつくり
 雪舟道のさらさら月影に
 木銭で安い櫓のぬくもり
 間の宿までも潤う行幸筋
 奈良に居なれて朝は早起
 不断着にせよと届きし手織縞
 早晚錆る箱の懐剣
 藪陰の花も綻ぶ頃なれや
 二人狗把摘む中垣もよし
 髪髻 髪をうなじのあたりで切り揃へ、垂らして置く小児の髪形。小
 児・幼児。 30 木銭 旅人が持参の米や乾飯を炊くため宿に払ふ薪代金。木

(春)

道菱

(夏)

(夏)

(冬)

(冬)

(春)

(春)

(注)
 25 髪髻 髪をうなじのあたりで切り揃へ、垂らして置く小児の髪形。小
 児・幼児。 30 木銭 旅人が持参の米や乾飯を炊くため宿に払ふ薪代金。木

三十五年十二月文音はじめ

鶴の脛まだ寒げ也春の草

温むも遅き古池の水

大物の中に雛幕交り来て

工場戻りの子等の集る

ほんのりと柿もいろ付昼の月

きりぎりす鳴踏臼の中

盆のうち遣ふ油を絞らばや

無理をいふても親は尊し

幾度かかはる心のはかなくて

化粧仕過て指をさゝる、

美しく電話の聲は知れ易き

蚊遣にくべる面んの彫屑

夕立のあとさっぱりと月涼し

烟草ぎらひの叩く舷

寝てきけば波の淡路は過にけり

紙の出處はこゝと知らする

撞な鐘花は七日ときまりあり

價も問はず飯蛸を買

三十五年十二月文音はじめ
③「鶴の脛」の巻

1 鶴の脛まだ寒げ也春の草 (春) 大道

2 温むも遅き古池の水 (春) 池菱

3 大物の中に雛幕交り来て (春)

4 工場戻りの子等の集る (春)

5 ほんのりと柿もいろ付昼の月 (秋)

6 きりぎりす鳴踏臼の中 (秋)

7 盆のうち遣ふ油を絞らばや (秋)

8 無理をいふても親は尊し (秋)

9 幾度かかはる心のはかなくて (秋)

10 化粧仕過て指をさゝる、 (秋)

11 美しく電話の聲は知れ易き (秋)

12 蚊遣にくべる面んの彫屑 (夏)

13 夕立のあとさっぱりと月涼し (夏)

14 烟草ぎらひの叩く舷 (夏)

15 寝てきけば波の淡路は過にけり (夏)

16 紙の出處はこゝと知らする (春)

17 撞な鐘花は七日ときまりあり (春)

18 價も問はず飯蛸を買 (春)

(注) 3 大物 綿織物・麻織物など太い糸の織物の総称。絹織物に対して言ふ。

18 飯蛸 正月、二月頃さかんに出る。頭のなかに飯粒のよふなものがある
ので言ふ。

簾店夏を隣に景気能く
姉は十九に妹は二十よ
道菱

同 国自慢お江戸自慢を右左

泣せた跡は笑ふ幕切

雪と見し曇りも今は何もなし

笛や太鼓や神送りする

真夜中に響の音のいさましく

七日とまりし大井川あき

おかやきの中央に急な飯使

今や玄関に白こかし出す

松が枝も竹も見おろす樓の月

碓打こむ水玉のきり

ナウ 冬近し〜と襖繕ふて

手真似嘶で唾は黙頭

蒔た餌は食はで俵をせゝる雉

富だ庄屋にあたる富蘭

植足した人の名を呼花の山

式三里四方青麦の畑

富たはなまゝく局圖

格馬〜〜〜

ので言ふ。

19 簾店夏を隣に景気能く (春) 道菱

20 姉は十九に妹は二十よ (春) 道菱

21 国自慢お江戸自慢を右左 (春) 道菱

22 泣せた跡は笑ふ幕切 (冬) 道菱

23 雪と見し曇りも今は何もなし (冬) 道菱

24 笛や太鼓や神送りする (冬) 道菱

25 真夜中に響の音のいさましく (冬) 道菱

26 七日とまりし大井川あき (冬) 道菱

27 おかやきの中央に急な飯使 (秋) 道菱

28 今や玄関に白こかし出す (秋) 道菱

29 松が枝も竹も見おろす樓の月 (秋) 道菱

30 碓打こむ水玉のきり (秋) 道菱

31 冬近し〜と襖繕ふて (秋) 道菱

32 手真似嘶で唾は黙頭 (秋) 道菱

33 蒔た餌は食はで俵をせゝる雉 (秋) 道菱

34 富だ庄屋にあたる富蘭 (春) 道菱

35 植足した人の名を呼花の山 (春) 道菱

36 式三里四方青麦の畑 (春) 道菱

(注) 27 おかやき ほかの男女が親しくしているのを、はたからやきもちを焼くこと。

後手より音多き事ありしとん

時より此の巻

時鳥船は伏見へつきに鬼池菱
油もへらず短夜の月
大石を往還狭く引出して

何のしらせか拍子木の鳴る

名にも似ず身のあた、まる散酒

馴れて我強き老の氷魚取り

今迄は棄嫌て押通し

隠しかねたは腹と顔いろ

誰ならむ屏風のうちの高軒

夏は入江に掛出しの軒

松脂にへばり付たる蟬の羽

練香絶えぬ墓に詣る

今日は寸广翌日は何所の月や見む

雁が音寒う足の出る夜具

後の雛迄ゆるくと宿の菊

算の水も薫り持て来る

馬の背で送る豆腐も花の当

日永しとさへいわぬ此頃

大石を往還狭く引出して
何のしらせか拍子木の鳴る
名にも似ず身のあた、まる散酒
馴れて我強き老の氷魚取り
今迄は棄嫌て押通し
隠しかねたは腹と顔いろ
誰ならむ屏風のうちの高軒
夏は入江に掛出しの軒
松脂にへばり付たる蟬の羽
練香絶えぬ墓に詣る
今日は寸广翌日は何所の月や見む
雁が音寒う足の出る夜具
後の雛迄ゆるくと宿の菊
算の水も薫り持て来る
馬の背で送る豆腐も花の当
日永しとさへいわぬ此頃

明治三十五年十二月文音はじめ
④時鳥の巻

1 時鳥船は伏見へつきに鬼池菱
(夏)

2 油もへらず短夜の月
(夏) 大道

3 大石を往還狭く引出して
(夏)

4 何のしらせか拍子木の鳴る
(冬)

5 名にも似ず身のあた、まる散酒
(冬)

6 馴れて我強き老の氷魚取り
(冬)

7 今迄は棄嫌て押通し
(冬)

8 隠しかねたは腹と顔いろ
(冬)

9 誰ならむ屏風のうちの高軒
(夏)

10 夏は入江に掛出しの軒
(夏)

11 松脂にへばり付たる蟬の羽
(夏)

12 練香絶えぬ墓に詣る
(夏)

13 今日寸广翌日は何所の月や見む
(秋)

14 雁が音寒う足の出る夜具
(秋)

15 後の雛迄ゆるくと宿の菊
(秋)

16 算の水も薫り持て来る
(秋)

17 馬の背で送る豆腐も花の当
(春)

18 日永しとさへいわぬ此頃
(春)

(注)

5 散酒 奈良の名産で、酒の中に糯米の糝を浮かべたもの。羹酒。

13寸广 須磨。15後の雛 九月九日の節句の菊雛。三月三日の春の雛祭りに

対して言ふ。

浅草の三社祭り 張込で
活人形は龜八の作
百年の後を斗るも苦勞性
積れば高き水道の銭
掛乞の囃子て来たる黄金草
大蠟燭の流れ禁厭ふ
法命の嫁は庄屋の妹にて
置所なき車長持
左富士原よし原の戻り道
精進料理好む温泉戻り
ちらほらと古い来様子宵の月
硯にうける芋の葉の露

浅草の三社祭り 張込で
活人形は龜八の作
百年の後を斗るも苦勞性
積れば高き水道の銭
掛乞の囃子て来たる黄金草
大蠟燭の流れ禁厭ふ
法命の嫁は庄屋の妹にて
置所なき車長持
左富士原よし原の戻り道
精進料理好む温泉戻り
ちらほらと古い来様子宵の月
硯にうける芋の葉の露
白牛の親子八匹秋貢ぎ
汽車の窓から皆んな顔出す
文明の世のともし火は日本記
実に実行は見よしきよし
咲立て生壁ながら花の宿
陽炎もゆる潺湲の上

(春) 道

菱

(冬)

(秋)

(秋)

(秋)

(春)

(春)

- 19 浅草の三社祭り、五月十七、十八日で、今は夏の季語。古くは陰曆三月で春。23掛乞、売掛金の回収、又はその回収に歩く人。盆暮の二回の決済が普通。季題としては年末の掛乞。27左富士、原から吉原へ西行すると道が曲折して右手に見えていた富士山が左手に見える。36潺湲、さらさらと流れる水。
- 20 活人形は龜八の作
- 21 百年の後を斗るも苦勞性
- 22 積れば高き水道の銭
- 23 掛乞の囃子て来たる黄金草
- 24 大蠟燭の流れ禁厭ふ
- 25 法命の嫁は庄屋の妹にて
- 26 置所なき車長持
- 27 左富士原よし原の戻り道
- 28 精進料理好む温泉戻り
- 29 ちらほらと古い来様子宵の月
- 30 硯にうける芋の葉の露
- 31 白牛の親子八匹秋貢ぎ
- 32 汽車の窓から皆んな顔出す
- 33 文明の世のともし火は日本記
- 34 実に実行は見よしきよし
- 35 咲立て生壁ながら花の宿
- 36 陽炎もゆる潺湲の上

三十六年はじめ

花の山の巻

月も今句ふばかりぞ花の山 痴楽
 鐘の音遠く吹送る東風 池菱
 麗に雫する馬の嘶て 露蕉
 顔は知らねど馴た挨拶 楽蕉
 雨ふらば壁に来て居よ秋の蟬 楽蕉
 朝寒ながら雑魚の安賣 楽菱
 7 やる先をきめてからなる菌狩 楽菱
 8 名よりも元といふが通り名 楽菱
 9 行燈は何のためやら薄ぐらく 楽菱
 10 算傳に清水流るる 楽菱
 11 更衣したぞと覗く格子先 楽菱
 12 財布探りて首をかすげる 楽菱
 13 月も未だ二日は誰も気のつかず 楽菱
 14 黄ばみそめたる園の鶏頭 楽菱
 15 旅嬉しふして筑波を膳の上 楽菱
 16 長生するは何よりの徳 楽菱
 17 その中に一樹眼につく白椿 楽菱
 18 茶の湯の席を崩す鶯 楽菱

⑤花の山の巻

- 1 月も今句ふばかりぞ花の山 (春)
- 2 鐘の音遠く吹送る東風 (春)
- 3 麗に雫する馬の嘶て (春)
- 4 顔は知らねど馴た挨拶 (春)
- 5 雨ふらば壁に来て居よ秋の蟬 (秋)
- 6 朝寒ながら雑魚の安賣 (秋)
- 7 やる先をきめてからなる菌狩 (秋)
- 8 名よりも元といふが通り名 (秋)
- 9 行燈は何のためやら薄ぐらく (秋)
- 10 算傳に清水流るる (夏)
- 11 更衣したぞと覗く格子先 (夏)
- 12 財布探りて首をかすげる (夏)
- 13 月も未だ二日は誰も気のつかず (秋)
- 14 黄ばみそめたる園の鶏頭 (秋)
- 15 旅嬉しふして筑波を膳の上 (秋)
- 16 長生するは何よりの徳 (春)
- 17 その中に一樹眼につく白椿 (春)
- 18 茶の湯の席を崩す鶯 (春)

3 雫 尿のこと。

(注)

明治三十六年一月興行

落葉を今ぐりて古葉を破り見
庭ぬらすほどなさぬ淡雪
暮遅き油断を終に夜道して
袂をふれば碁石三つ四つ
雲影に負けじと走る月の船
鳩は梢にむしは千草に

接待の支度に釜を磨かざる
埃りもたぬ村長の門
おほこ気に思ひ通してうつとりと
拍子木せはし丑満の頃
こは如何に長脇差の果し合
あたら村宝は水と成りけり
薄すりと若葉隠れの昼の月
さまらぬ用に旅も退屈
十六盤の入りぬ嗚は面白く
能舞台から言伝が来る
是程の花に飯賣る家もなし
鳥の羽風に田螺返止む

長脇差
池
楽
菱

楽
菱

楽
菱

楽
菱

明治三十六年一月興行
⑥「落の臺」の巻

- 1 落の臺今日は古葉を破り見 (春)
- 2 庭ぬらすほどなさぬ淡雪 (春)
- 3 暮遅き油断を終に夜道して (春)
- 4 袂をふれば碁石三つ四つ (秋)
- 5 雲影に負けじと走る月の船 (秋)
- 6 鳩は梢にむしは千草に (秋)
- 7 接待の支度に釜を磨かざる
- 8 埃りもたぬ村長の門
- 9 おほこ気に思ひ通してうつとりと
- 10 拍子木せはし丑満の頃
- 11 こは如何に長脇差の果し合
- 12 あたら村宝は水と成りけり
- 13 薄すりと若葉隠れの昼の月 (夏)
- 14 きまらぬ用に旅も退屈
- 15 十六盤の入りぬ嗚は面白く
- 16 能舞台から言伝が来る (春)
- 17 是程の花に飯賣る家もなし (春)
- 18 鳥の羽風に田螺返止む (春)

(注) 11長脇差 幕令では長さ一尺八寸以上の脇差を言い、町人は差すことを禁止された。近世後期、長脇差で関東地方を横行した博突打ちの異名。

池
楽
菱

楽
菱

春の野にうかれて行て叱られて
二階へ運ぶ葛籠重たき
楽

言くとし神の御坂は登りよく
ふりさげ見れば静かなる海
乳がはると時雨の窓をそつと明
寒竹の子に覆ふ古笠
苦の屋根丸木柱も心から
牛を屠るに刀小さき
初陣の功名手柄誉めそやし
腹は透ても食事急がぬ
月落てからりと隙な川岸通
朝寒配る尼寺の鐘
市にある野菜はどれも露のいろ
片扉丈け明ける裏木戸
辛抱の礎なりと酒をやめ
白壁よりもわら屋好もし
雨の花翻す雫を餘波にて
二日見ぬ間に青麦の伸
二りふあつちまきまの伸

19 春の野にうかれて行て叱られて (春)

20 二階へ運ぶ葛籠重たき

21 高くとも神の御坂は登りよく

22 ふりさげ見れば静かなる海

23 乳がはると時雨の窓をそつと明

24 寒竹の子に覆ふ古笠 (冬)

25 苦の屋根丸木柱も心から

26 牛を屠るに刀小さき (冬)

27 初陣の功名手柄誉めそやし

28 腹は透ても食事急がぬ

29 月落てからりと隙な川岸通 (秋)

30 朝寒配る尼寺の鐘 (秋)

31 市にある野菜はどれも露のいろ (秋)

32 片扉丈け明ける裏木戸

33 辛抱の礎なりと酒をやめ

34 白壁よりもわら屋好もし (春)

35 雨の花翻す雫を餘波にて (春)

36 二日見ぬ間に青麦の伸

(注) 32 裏木戸 裏の出入口。

三十二年二月十五日 日記

焚捨た藻汐烟るや雲の峰

一重羽織も脱げは荷に成

塩辛き田舎料理も喰馴て

秘蔵の刀錆ず曇らず

月はまだくくよしと臂枕

つばみふくる、鉢植の菊

露踏だ駒の嘶く駅はづれ

京へ入る日と早立をする

年甲斐もなき面目を失ふて

腹が痛いと宿下りする

書残す弁も短かき命なり

暗い處に光る猫の眼

荒磯は衝も月も吹きさらし

百物語り囲爐裏取巻く

約束の時を法命終いはづれ

二度目の使雷に逢ふ

花ちりて朝寝の癖を又はじめ

踏戻りする苗代の水

三十六年二月十五日起

⑦「焚捨た」の巻

1 焚捨た藻汐烟るや雲の峰 (夏) 痴楽

2 一重羽織も脱げは荷に成 (夏) 池菱

3 塩辛き田舎料理も喰馴て (夏) 池菱

4 秘蔵の刀錆ず曇らず (秋) 池菱

5 月はまだくくよしと臂枕 (秋) 池菱

6 つばみふくる、鉢植の菊 (秋) 池菱

7 露踏だ駒の嘶く駅はづれ (秋) 池菱

8 京へ入る日と早立をする (秋) 池菱

9 年甲斐もなき面目を失ふて (秋) 池菱

10 腹が痛いと宿下りする (秋) 池菱

11 書残す弁も短かき命なり (秋) 池菱

12 暗い處に光る猫の眼 (秋) 池菱

13 荒磯は衝も月も吹きさらし (冬) 池菱

14 百物語り囲爐裏取巻く (冬) 池菱

15 約束の時を法命終いはづれ (冬) 池菱

16 二度目の使雷に逢ふ (夏) 池菱

17 花ちりて朝寝の癖を又はじめ (春) 池菱

18 踏戻りする苗代の水 (春) 池菱

(注) 1 藻汐 藻塩。海藻からとる塩。20 詩 漢詩。24 油賣 点灯用種油の行商人。

得火の折るえゆらる藤
 中々深き詩の意味
 腑へ落ちるをねたあたりに
 泣顔は悟られまじと咳拂ひ
 泣顔を悟られまじと咳拂ひ
 捨子の足らぬ薫りに伽羅焚し
 遠近に鳴る暮六つの鐘
 是崎を出れば弓手の南禅寺
 笑はば笑らへ通り一ぺん
 嗚呼たのし溢茶に念佛窓の月
 嗚子傳ひに行くが無造作
 末枯の魁したる屋根の草
 御家流とはむかしめく筆
 蒔繪して瓢の底を隠すらん
 草履つかむで玄関に待つ
 花守と見らるゝ花の下住居
 雉子東雲を告る山添

樂 菱

- 19 裸火の折々見ゆる夏隣 (春)
 - 20 中々深き詩の意味 (春)
 - 21 腑に落ちるまでなだめたり叱りたり
 - 22 讀まず無理やり返す去り状
 - 23 泣顔を悟られまじと咳拂ひ
 - 24 あの觸聲は油賣りかや
 - 25 捨子の足らぬ薫りに伽羅焚し
 - 26 遠近に鳴る暮六つの鐘
 - 27 是崎を出れば弓手の南禅寺
 - 28 笑はば笑らへ通り一ぺん (秋)
 - 29 嗚呼たのし溢茶に念佛窓の月 (秋)
 - 30 嗚子傳ひに行くが無造作 (秋)
 - 31 末枯の魁したる屋根の草 (秋)
 - 32 御家流とはむかしめく筆 (秋)
 - 33 蒔繪して瓢の底を隠すらん (秋)
 - 34 草履つかむで玄関に待つ (春)
 - 35 花守と見らるゝ花の下住居 (春)
 - 36 雉子東雲を告る山添 (春)
- (注)
- 25 伽羅 香木の皮をとつて香料としたもの(奇楠)。27 弓手 左の手。または左の方。27 南禅寺 京都東山の北に在る京都五山の一。32 御家流 尊円親王から出た書法の流儀。

瀧冷に片山早き紅葉かな
 芒隠れに夕烟り立つ
 半分の月さへ影は隈もなし
 籬に掛けた蓑うるさがる
 銅の蠅いくら追ても拂ふても
 簾巻かせて鯛の惣を聞く
 堆き李白が居間の捨反古
 徳利の口を誰が欠たやら
 斯うなれば隠しおほせぬ岩田帯
 今年の味噌は少し甘塩
 用のなき身にも師走はそはくと
 忘れ勝なる買物の数
 月の出を気長にも待つ奥座敷
 盆過の経有難くなし
 勘当の詫も叶はず秋閑て
 筵戸破り這入瘦犬
 此の里は花も豆腐も名残とや
 草臥見せぬ畑打のふり

⑧「瀧冷に」の巻

- 1 瀧冷に片山早き紅葉かな (秋) 池菱
- 2 芒隠れに夕烟り立つ (秋) 痴楽
- 3 半分の月さへ影は隈もなし (秋)
- 4 籬に掛けた蓑うるさがる (夏)
- 5 銅の蠅いくら追ても拂ふても (夏)
- 6 簾巻かせて鯛の惣を聞く (夏)
- 7 堆き李白が居間の捨反古 (冬)
- 8 徳利の口を誰が欠たやら (冬)
- 9 斯うなれば隠しおほせぬ岩田帯 (冬)
- 10 今年の味噌は少し甘塩 (冬)
- 11 用のなき身にも師走はそはくと (冬)
- 12 忘れ勝なる買物の数 (秋)
- 13 月の出を気長にも待つ奥座敷 (秋)
- 14 盆過の経有難くなし (秋)
- 15 勘当の詫も叶はず秋閑て (秋)
- 16 筵戸破り這入瘦犬 (秋)
- 17 此の里は花も豆腐も名残とや (春)
- 18 草臥見せぬ畑打のふり (春)

(注) 4 籬 粗い竹垣を言う。6 翹 うつたへ。

能く出来るものいさうな雛の口
 御面奉行せよとすゝむる
 碁に負けて将碁に勝てば五歩と五歩
 仲間部屋に駈聞ゆる
 貧乏は下た手に出てもふまれたり
 流行らぬ醫者の落さるゝ髭
 兎に角に堪忍袋ふくらせよ
 明け易き夜も怠らぬ雉
 持たいる流すな雨のかいつばた
 草鞋しめれば道の抄取
 本意なくも月は梢にちよい隠れ
 近い砧に機嫌損ふ
 秋の行く際は何やら不自由
 大工左官も国の土ふむ
 隙過た隠居も今は閑敷
 名古屋に家を持って以来
 花の雲海原かけて横はる
 眼の及ぶ丈葦蒲公英
 夜の花を西の空に挿して
 眼の及ぶ丈葦蒲公英

樂 菱

- 19 ナ 能く出来るものいさうな雛の口 (春)
- 20 コ 御面奉行せよとすゝむる (春)
- 21 ト 碁に負けて将碁に勝てば五歩と五歩 (春)
- 22 チ 仲間部屋に駈聞ゆる (春)
- 23 ツ 貧乏は下た手に出てもふまれたり (春)
- 24 テ 流行らぬ醫者の落さるゝ髭 (春)
- 25 ト 兎に角に堪忍袋ふくらせよ (春)
- 26 ナ 明け易き夜も怠らぬ雉 (夏)
- 27 ニ 持たいる流すな雨のかいつばた (夏)
- 28 ホ 草鞋しめれば道の抄取 (夏)
- 29 ケ 本意なくも月は梢にちよい隠れ (秋)
- 30 コ 近い砧に機嫌損ふ (秋)
- 31 サ 秋の行く際は何やら不自由に (秋)
- 32 シ 大工左官も国の土ふむ (秋)
- 33 ツ 隙過た隠居も今は閑敷 (秋)
- 34 テ 名古屋に家を持って以来 (春)
- 35 ト 花の雲海原かけて横はる (春)
- 36 ナ 眼の及ぶ丈葦蒲公英 (春)

(注)

27 かいつばた かきつばた。杜若。燕子花。アヤメ科の多年草。29 本意
 かねてからの意向。もともとの意味の意。

照夜三よりの月かな

山に山重る雪の山路成

燈し替りに焚添る楢

秋の暮からすも嗚呼と裸木に

破れ芭蕉の中の廣さよ

あれ／＼と指さす月の登り際

向ふの椽へ大股に飛

何事も年頭丈け気の付て

駆落者を見逼してやる

風薫るまで待遠い掛り舟

まじろむ間に馴れる早鮎

国訛り笑ひほごれて縁と成

隙さへあれば覗く武者窓

ふいと出て仲間入する月の宴

仕舞むしろの露にしつとり

澁鮎を喰ふて心も錆らかし

家に傳はる鏡研する

花咲てから来はじめた團子賣

一段高く飾る古雛

一庭まじりし物もな程

⑨「山に山」の巻

明治三十六年三月十八日

1 山に山重る雪の山路成

2 燈し替りに焚添る楢

3 秋の暮からすも嗚呼と裸木に

4 破れ芭蕉の中の廣さよ

5 あれ／＼と指さす月の登り際

6 向ふの椽へ大股に飛

7 何事も年頭丈け気の付て

8 駆落者を見逼してやる

9 風薫るまで待遠い掛り舟

10 まじろむ間に馴れる早鮎

11 国訛り笑ひほごれて縁と成

12 隙さへあれば覗く武者窓

13 ふいと出て仲間入する月の宴

14 仕舞むしろの露にしつとり

15 澁鮎を喰ふて心も錆らかし

16 家に傳はる鏡研する

17 花咲てから来はじめた團子賣

18 一段高く飾る古雛

(注)

8 駆落者 近世、庶民が無断で他郷に逃亡する者。10 早鮎 酢でしめた魚肉と飯を交互に重ねて漬け、一夜または数日で食べられるやうにする鮎の総称。15 洪鮎 落鮎。

(冬) 痴楽

(冬) 池菱

(秋)

(秋)

(秋)

(夏)

(夏)

(夏)

(秋)

(秋)

(秋)

(秋)

(春)

(春)

(春)

(春)

(春)

(春)

(春)

(春)

寶蔵の戸前に蜂の巣を組で

あつち御好く御好く

左なきだに重き荷物を積運

公事に勝ても算盤に負け

姫百合の後向たるかけのよさ

青簾から手まねきをする

菓子盆の中へ小判を掴み出し

むかしゆかしき野袴のいろ

冬陣は和睦をしたも深き思慮

強きを誉る鉢の寒菊

月をふむ覚悟で立た定飛脚

芒刈ても幽霊は居ぬ

ナウにひびくやうなる秋の鐘

祢宜を頼めば時待てという

生酔の我気候繰返し

ぶしはしらねど高い挨拶

咲満て闇を動かす花の波

野辺も田畑も春の賑い

世をたのむ御好く

世をたのむ御好く

(春)

楽 菱

(春)

(夏)

(夏)

(冬)

(冬)

(秋)

(秋)

(秋)

(秋)

(秋)

(秋)

(春)

(春)

(春)

(春)

(春)

(春)

(春)

- 19 宝蔵の戸前に蜂の巣を組で
- 20 あらた館にあるじ居ぬかや
- 21 左なきだに重き荷物を積運
- 22 公事に勝ても算盤に負け
- 23 姫百合の後向たるかけのよさ
- 24 青簾から手まねきをする
- 25 菓子盆の中へ小判を掴み出し
- 26 むかしゆかしき野袴のいろ
- 27 冬陣は和睦をしたも深き思慮
- 28 強きを誉る鉢の寒菊
- 29 月をふむ覚悟で立た定飛脚
- 30 芒刈ても幽霊は居ぬ
- 31 ナウにひびくやうなる秋の鐘
- 32 祢宜を頼めば時待てという
- 33 生酔の我気候繰返し
- 34 ぶしはしらねど高い挨拶
- 35 咲満て闇を動かす花の波
- 36 野辺も田畑も春の賑い

(注) 22公事 民事訴訟。裁判。29定飛脚 日を決めて定期的に定まった二地間を往復した飛脚。32祢宜 神職の一つ。通常、宮司または神主の次、祝「はふり」の上に位した。

三十二年四月一日
楠正成、正行の忠臣、
尾崎田池
 尾崎田池

数積めば富貴のものよ炭俵
 枯野の風は肌に応ふる
 土蔵普請奇妙の瓶を掘出して
 字典にもない文字の穿鑿
 梢まで蟻這登る今日の月
 連らも乱さず啗渡る雁
 静さの果を翻る、露の音
 隠すほど尚あらはる、酒
 鹹も甘いも皆んな知りながら
 城の落るを余所に見て居る
 楠の親子は国の寶なり
 香はしき名を世々に残して
 蚊帳振ふ間に朝月は消むとす
 思ひ出しては又ふさぎつ、
 湯上りにちらと床しき入癩
 釘付にする裏の潜戸
 近寄るな頼而此花十五日
 杖の先よりもゆる陽炎

⑩「数積めば」の巻

三十六年四月興行

- 1 数積めば富貴のものよ炭俵
- 2 枯野の風は肌に応ふる
- 3 土蔵普請奇妙の瓶を掘出して
- 4 字典にもない文字の穿鑿
- 5 梢まで蟻這登る今日の月
- 6 連らも乱さず啗渡る雁
- 7 静さの果を翻る、露の音
- 8 隠すほど尚あらはる、酒
- 9 鹹も甘いも皆んな知りながら
- 10 城の落るを余所に見て居る
- 11 楠の親子は国の寶なり
- 12 香はしき名を世々に残して
- 13 蚊帳振ふ間に朝月は消むとす
- 14 思ひ出しては又ふさぎつ、
- 15 湯上りにちらと床しき入癩
- 16 釘付にする裏の潜戸
- 17 近寄るな頼而此花十五日
- 18 杖の先よりもゆる陽炎

鎌田池菱
 成田痴楽
 尾崎桃零
 (冬) 池菱
 痴楽
 (冬) 桃零
 菱零
 (秋) 零
 零
 (秋) 零
 零
 (秋) 零
 零
 (春) 零
 零
 (春) 零
 零

(注) 11楠の親子 南朝の忠臣、楠正成、正行のこと。 15入癩 遊女などが誠意を示すため腕などに相手の名を入れ墨したもの。

を示すため腕などに桂手の名を入れ墨したもの。

夜を一つへらず人丸祭迄
 煙草休みもせず
 江戸ッ子といはる、丈の早合点
 産聲高く男なるらむ
 田を分けて弟を別家する積り
 鳥居の右手に明地四五町
 菖蒲咲く沼半分を埋るとや
 水鶏の叩く音に眼覚す
 嗚呼嬉し夢であつたと胸擦り
 鳴りのとまりし三井寺の鐘
 燈火の光を奪ふ暮の月
 稲刈込でせまき臺所
 色かへぬ松にからまる蔦紅葉
 指切た血で誓文を書く
 怪しいと思へばあやし張葛籠
 鼠嫌ひと成し飼猫
 情波めば花盗人も恕すらん
 弥生最中は兎角野心
 人丸祭 旧三月十八日。柿本人麿呂の忌日。人麿呂忌。28三井寺
 和歌山県にある西国巡礼の札所。紀三井寺。32誓文 神にかけて誓ふ誓約
 の文言。起請文。

19 夜具一つへらず人丸祭迄 (春) 楽 雫 菱

20 煙草休みもせず (春) 楽 雫 菱

21 江戸ッ子といはる、丈の早合点 (春) 楽 雫 菱

22 産聲高く男なるらむ (春) 楽 雫 菱

23 田を分けて弟を別家する積り (春) 楽 雫 菱

24 鳥居の右手に明地四五町 (春) 楽 雫 菱

25 菖蒲咲く沼半分を埋るとや (夏) 楽 雫 菱

26 水鶏の叩く音に眼覚す (夏) 楽 雫 菱

27 嗚呼嬉し夢であつたと胸擦り (夏) 楽 雫 菱

28 鳴りのとまりし三井寺の鐘 (秋) 楽 雫 菱

29 燈火の光を奪ふ暮の月 (秋) 楽 雫 菱

30 稲刈込でせまき臺所 (秋) 楽 雫 菱

31 色かへぬ松にからまる蔦紅葉 (秋) 楽 雫 菱

32 指切た血で誓文を書く (秋) 楽 雫 菱

33 怪しいと思へばあやし張葛籠 (秋) 楽 雫 菱

34 鼠嫌ひと成し飼猫 (春) 楽 雫 菱

35 情波めば花盗人も恕すらん (春) 楽 雫 菱

36 弥生最中は兎角野心 (春) 楽 雫 菱

三十二年四月下旬相はじめ
五月十日満尾

俳諧新派の巻

宿割や春演習の近い内
汽車から見れば皆んな雲雀野
畑打も器械仕事は捗取りて
パイプの入らぬ烟草吸付
月見とて椅子を並べる橋の上
外套取に走る漸寒
鳴皮入の靴の程よき
此頃は自由結婚流行し
符箋の付て戻る郵便
新築も若葉陰なる官幣社
分捕品を飾る日曜
板塀にかけたペンキに月泣り
ステッキ振て鹿を追かけ
からき世を何の糸瓜と壯士達
有味細工の入歯誂らへ
鉛筆も花見の用に携へて
長閑な町を過る自転車

- 1 宿割や春演習の近い内 (春) 露
- 2 汽車から見れば皆んな雲雀野 (春) 痴
- 3 畑打も器械仕事は捗取りて (春) 池
- 4 パイプの入らぬ烟草吸付 (秋) 蕉
- 5 月見とて椅子を並べる橋の上 (秋) 蕉
- 6 外套取に走る漸寒 (秋) 蕉
- 7 鳴皮入の靴の程よき (秋) 蕉
- 8 此頃は自由結婚流行し (秋) 蕉
- 9 符箋の付て戻る郵便 (秋) 蕉
- 10 新築も若葉陰なる官幣社 (夏) 蕉
- 11 分捕品を飾る日曜 (夏) 蕉
- 12 板塀にかけたペンキに月泣り (秋) 蕉
- 13 ステッキ振て鹿を追かけ (秋) 蕉
- 14 からき世を何の糸瓜と壯士達 (秋) 蕉
- 15 有味細工の入歯誂らへ (秋) 蕉
- 16 鉛筆も花見の用に携へて (春) 蕉
- 17 長閑な町を過る自転車 (春) 蕉

(注) 4人らぬ 要らぬの宛字。11官幣社 社格の一つで管内省から幣中を奉獻した神社。
15壮士 自由民権運動の闘士。15有味 アルミニウム。21武庫 兵庫県の地名。

鷲の籠も封る執達吏
 議員選挙に負て以来
 武庫の海觀艦式の賑やかさ
 アラビヤ買ふて種馬にする
 汗拭ふハンカチ貰ふ格子先
 小町水引く夏瘦の顔
 原被より同じ苦情を依頼され
 電気便りに宿を尋ぬる
 賢くも旧都に暫し御駐輦
 楽隊の書はみんな横文字
 勳章の光弥増す今日の月
 露語と英語も馴れて出代
 カバンから土産に出した丹波栗
 内務省よりおゆるしの醫者
 演説の番人と成る警部三
 扱も見事に染た油繪
 詩も發句も花の招魂社
 全權公使交代の春
 詩も發句も花の招魂社
 全權公使交代の春
 滿尾

- 19 鷲の籠も封る執達吏 (春) 蕉
- 20 議員選挙に負て以来 (春) 蕉
- 21 武庫の海觀艦式の賑やかさ (春) 蕉
- 22 アラビヤ買ふて種馬にする (春) 蕉
- 23 汗拭ふハンカチ貰ふ格子先 (夏) 蕉
- 24 小町水引く夏瘦の顔 (夏) 蕉
- 25 原被より同じ苦情を依頼され (夏) 蕉
- 26 電気便りに宿を尋ぬる (夏) 蕉
- 27 賢くも旧都に暫し御駐輦 (夏) 蕉
- 28 楽隊の書はみんな横文字 (夏) 蕉
- 29 勳章の光弥増す今日の月 (秋) 蕉
- 30 露語と英語も馴れて出代 (秋) 蕉
- 31 カバンから土産に出した丹波栗 (秋) 蕉
- 32 内務省よりおゆるしの醫者 (秋) 蕉
- 33 演説の番人と成る警部三 (秋) 蕉
- 34 扱も見事に染た油繪 (春) 蕉
- 35 詩も發句も花の招魂社 (春) 蕉
- 36 全權公使交代の春 (春) 蕉

11 若士 自由民権運動の歴史 11 春明 アルミニウム 2 正風 5 尾野の封る

明治三十六年五月十日

夕立や麦搗臼に掛る露

根上り松にからむ昼顔

平な海に藻屑の漂ふて

派手に鉞を遣ふ屋根葺

月が雲覆へば笛を吹きはじめ

山を離る、雁が音の棹

不断より秋は入り込むたね賣

思ひ直して小戻りをする

どうしても分別の臍固まらず

苦になる雪の降りやうでなし

イも行も帰るも勢田の橋

馬士の喧嘩に半日おくるる

棒杭の文字も分らぬ薄月夜

鳥居の奥も吐霧の色

秋深し谷又深し斧の音

天井板にふしなしを撰る

気配のうちに花散る夕間暮

鷹となりしか見えざる鳩

⑫「夕立や」の巻

明治三十六年五月十日はじむ

1 夕立や麦搗臼に掛る露

2 根上り松にからむ昼顔

3 平な海に藻屑の漂ふて

4 派手に鉞を遣ふ屋根葺

5 月が雲覆へば笛を吹きはじめ

6 山を離る、雁が音の棹

7 不断より秋は入り込むたね賣

8 思ひ直して小戻りをする

9 どうしても分別の臍固まらず

10 苦になる雪の降りやうでなし

11 イも行も帰るも勢田の橋

12 馬士の喧嘩に半日おくるる

13 棒杭の文字も分らぬ薄月夜

14 鳥居の奥も吐霧の色

15 秋深し谷又深し斧の音

16 天井板にふしなしを撰る

17 気配のうちに花散る夕間暮

18 鷹となりしか見えざる鳩

(夏)

(夏)

(夏)

(秋)

(秋)

(秋)

(秋)

(秋)

(冬)

(冬)

(冬)

(秋)

(秋)

(秋)

(春)

(春)

(春)

露 蕉
痴 蕉
池 蕉

蕉 菱
蕉 菱
蕉 菱

蕉 菱
蕉 菱
蕉 菱

蕉 菱
蕉 菱
蕉 菱

蕉 菱
蕉 菱
蕉 菱

蕉 菱
蕉 菱
蕉 菱

蕉 菱
蕉 菱
蕉 菱

蕉 菱
蕉 菱
蕉 菱

蕉 菱
蕉 菱
蕉 菱

(注) 12馬士 馬方。18此の句は「鷹化して鳩となる」という仲春の季語を踏まへる。

皇後三十九年夏 其

足跡なくて涼しき夏の霜
 清水へ通ふ谷の柴橋
 世渡りも細き鳥羽絵に筆とりて
 二度の勅使を仰ぐかしこさ
 名月を勿体なしと跪き
 錦染出す山々の景
 澁るとも又捨かねる鮎の味
 むかし語りになればほゝ笑む
 情ある母の玉章繰返し
 何が見ゆるか犬の長吼
 国民の貢に太る宮柱
 時刻違へず廻る棟梁
 十六夜の月は中々待遠く
 翻れし萩も掃をしむ庭
 秋深し旅行の札のこゝかしこ
 車の荷物湯気の立なり
 花盛り言問団子賣の能き
 蝶の羽風に消る水泡

明治三十九年度夏日
⑬「足跡」の巻

- 1 足跡あしあとのなくて涼すずしき夏の霜しも (夏) 雷かみなり 庵いほ
- 2 清水しみずへ通とほふ谷やの柴橋しばしほ (夏) 池いけ 菱あし
- 3 世渡りよわたりも細ほそき鳥羽絵とりばに筆ふでとりて (夏) 雷かみなり 庵いほ
- 4 二度にどの勅使ちうしを仰あやぐかしこさ (夏) 池いけ 菱あし
- 5 名月なづきを勿体もうたなしと跪ひざまき (秋) 菱あし 庵いほ
- 6 錦染にしきぞめ出す山々やまの景けい (秋) 菱あし 庵いほ
- 7 澁しぶるとも又捨またすかねる鮎あめの味あじ (秋) 菱あし 庵いほ
- 8 むかし語りかたごになればほゝ笑あむ (秋) 菱あし 庵いほ
- 9 情なさけある母ははの玉章たまづき繰くりか返しへ (秋) 菱あし 庵いほ
- 10 何なにが見みゆるか犬いぬの長吼ながほ (秋) 菱あし 庵いほ
- 11 国民こくたんのの貢みつに太ふる宮柱みやはしら (秋) 菱あし 庵いほ
- 12 時刻じこく違ちがへず廻まわる棟梁とうりやう (秋) 菱あし 庵いほ
- 13 十六夜いざよひの月つきは中々ななか待遠まちどほく (秋) 菱あし 庵いほ
- 14 翻こぼれし萩はぎも掃さうをしむ庭にわ (秋) 菱あし 庵いほ
- 15 秋深あきふかし旅行りやうの札ふだのこゝかしこ (秋) 菱あし 庵いほ
- 16 車くるまの荷物にもの湯気ゆげの立たつなり (春) 菱あし 庵いほ
- 17 花盛はなまかり言問こととひたん団子賣だんごうの能よき (春) 菱あし 庵いほ
- 18 蝶ちょうの羽風はなかぜに消きる水泡すいぱう (春) 菱あし 庵いほ

(注)
 9 玉章 タマアズサの約。立派な文章。他人の手紙を敬って言ふ。
 十六夜 陰暦十六日の夜。17言問団子 江戸の隅田川の堤辺にある名所の団子。

仁名寺の縁起（春）
 直に應とは言はぬ関守
 弁慶の終い出おくれし村芝居
 觸れば落る棚の榎木
 姉よりも早き妹の縁の沙汰
 天保銭は遣ひ道なし
 屑籠へ丸め込むたる古曆
 大晦日は何所もさざめく
 玄翁を借りて走らす壁隣り
 格子の外へつるす稽古着
 朝の月帳振ふ間に見えずなる
 かいくれ知れぬ蚤の行先
 いかめしう古代更紗の髷袋
 息を押して抜く金箔
 勘当はよりて柩の後に添ひ
 隅田も綾瀬も包む薄雲
 めつつきりと杖のへりめも花の旅
 放し飼する庭の黄鳥
 天保銭 天保年中に铸造された銅銭。明治二十年まで通用。時勢遅れ
 やおろかな者をあざけつて言ふ語。27玄翁 玄能。頭の両端にとがりのな
 い金槌。29簾 蚊帳。31髷袋 長い髷の人が冬期髷を入れて耳より吊り置
 く袋。

- 19 仁名寺の縁起（春）
- 20 直に應とは言はぬ関守
- 21 弁慶の終い出おくれし村芝居
- 22 觸れば落る棚の榎木
- 23 姉よりも早き妹の縁の沙汰
- 24 天保銭は遣ひ道なし
- 25 屑籠へ丸め込むたる古曆
- 26 大晦日は何所もさざめく
- 27 玄翁を借りて走らす壁隣り
- 28 格子の外へつるす稽古着
- 29 朝の月帳振ふ間に見えずなる
- 30 かいくれ知れぬ蚤の行先
- 31 いかめしう古代更紗の髷袋
- 32 息を押して抜く金箔
- 33 勘当はよりて柩の後に添ひ
- 34 隅田も綾瀬も包む薄雲
- 35 めつつきりと杖のへりめも花の旅
- 36 放し飼する庭の黄鳥

引返せ海は果なし時鳥
 波香の走る幡の朝風
 廣椽を影のさす程ふき抜て
 年頭丈け気転ものなり
 膳の間にのつそり月は登りかけ
 案山子の役も済で芽出度
 八瀬のむし片生の虫と賣歩行
 颯らるゝとは知らぬ挨拶
 人伝手に白粧買も秘し隠し
 船からそれと渡す履物
 敲けども押せどもあかぬ裏扉
 櫓太鼓も天下泰平
 稲むしろ織端もなき月の影
 旅の大臣にきかす鹿笛
 越し方を思ひ出せば肌寒く
 見本通に上るたんざく
 世を悟れくと花の散りはじめ
 眠気さすほど霞む晩鐘
 廣椽 寢殿造りの廂の間。幅の広い縁側。4年頭 仲間の中で最も年齢
 の多いこと。また、その人。13稲むしろ 稲の面のむしろのようなものを
 言う。

⑭「引返せ」の巻

- 1 引返せ海は果なし時鳥 (夏) 池
- 2 波香の走る幡の朝風 (夏) 雷
- 3 廣椽を影のさす程ふき抜て (夏) 庵
- 4 年頭丈け気転ものなり (秋) 菱
- 5 膳の間にのつそり月は登りかけ (秋) 庵
- 6 案山子の役も済で芽出度 (秋) 菱
- 7 八瀬のむし片生の虫と賣歩行 (秋) 庵
- 8 颯らるゝとは知らぬ挨拶 (秋) 菱
- 9 人伝手に白粧買も秘し隠し (秋) 庵
- 10 船からそれと渡す履物 (秋) 菱
- 11 敲けども押せどもあかぬ裏扉 (秋) 庵
- 12 櫓太鼓も天下泰平 (秋) 菱
- 13 稲むしろ織端もなき月の影 (秋) 庵
- 14 旅の大臣にきかす鹿笛 (秋) 菱
- 15 越し方を思ひ出せば肌寒く (秋) 庵
- 16 見本通に上るたんざく (秋) 菱
- 17 世を悟れくと花の散りはじめ (春) 庵
- 18 眠気さすほど霞む晩鐘 (春) 菱

(注)
 3 廣椽 寢殿造りの廂の間。幅の広い縁側。4年頭 仲間の中で最も年齢
 の多いこと。また、その人。13稲むしろ 稲の面のむしろのようなものを
 言う。

足跡へにじる田にし（ころげ込）
 酒に酔はねば往かぬ伯樂
 山科の腰拔武士と唄はれて
 曲り角から急がせる駕
 恐ろしき謀計の洩る、長局
 ふし穴もなき黒塗の堀
 寝た犬のむつくり起る玉籤
 祢宜の門邊に戦く枯芦
 去りながら百物語面白し
 鬼が出ぬのに機嫌損ふ
 はら／＼と配所の月を見ては泣
 連におくれてあせる雁
 樽柿を盆に並べる江戸土産
 一つはほしき鉄のつり橋
 寄附金は思の外に集りて
 音せぬ雨に光る飛石
 弓手には瓢妻手には花一枝
 往来長閑な千軒の町
 伯樂 馬喰。①馬のよしあしを見わたり、病気を治したりする人。
 ②牛馬の売買や周旋する人。23長局 宮中や大奥で長い一棟の建物をいく
 つもに仕切った女房などの部屋。35妻手 馬手、右手。

- 19 足跡へにじる田にし（ころげ込） (春) 全
- 20 酒に酔はねば往かぬ伯樂 (春) 菱
- 21 山科の腰拔武士と唄はれて (春) 庵
- 22 曲り角から急がせる駕 (春) 菱
- 23 恐ろしき謀計の洩る、長局 (春) 庵
- 24 ふし穴もなき黒塗の堀 (春) 菱
- 25 寝た犬のむつくり起る玉籤 (春) 庵
- 26 祢宜の門邊に戦く枯芦 (春) 菱
- 27 去りながら百物語面白し (春) 庵
- 28 鬼が出ぬのに機嫌損ふ (春) 菱
- 29 はら／＼と配所の月を見ては泣 (秋) 庵
- 30 連におくれてあせる雁 (秋) 菱
- 31 樽柿を盆に並べる江戸土産 (秋) 庵
- 32 一つはほしき鉄のつり橋 (秋) 菱
- 33 寄附金は思の外に集りて (秋) 庵
- 34 音せぬ雨に光る飛石 (春) 菱
- 35 弓手には瓢妻手には花一枝 (春) 庵
- 36 往来長閑な千軒の町 (春) 菱

略（于時に明治三十有九年夏日興行）

(注)
 20 伯樂 馬喰。①馬のよしあしを見わたり、病気を治したりする人。
 ②牛馬の売買や周旋する人。23長局 宮中や大奥で長い一棟の建物をいく
 つもに仕切った女房などの部屋。35妻手 馬手、右手。

明治四十年九月より

山は晴水は澄とも秋の暮れ

萩や芒やまばらなる道

三竿の月に百歩の杖曳て

腰を休める丈けの四阿屋

火桶にもまた慾のなき小春空

鶴の羽音にあきむしのたつ

寄せて来る和歌の浦回の片男波

ふり分け髪も肩過る頃

左遷になげの情を打かこち

いづぞ晴なん雲の通路

杉檜鬱蒼とした山嶺

女人堂にてほどく麴桶

夏も窮り二十九日の月瘦て

取りに来た燈に身をとかす虫

法律の裏は潜れぬ世の中に

嘘も方便頓智即妙

玉莖も喜撰もきらず花盛り

日永の椽に届く小包

菱水 菱水

⑮ 「山は晴れ」の巻

明治四十年九月はじむ

1 山は晴水は澄とも秋の暮れ (秋) 娛水

2 萩や芒やまばらなる道 (秋) 池菱

3 三竿の月に百歩の杖曳て (秋) 水

4 腰を休める丈けの四阿屋 (冬) 菱

5 火桶にもまた慾のなき小春空 (冬) 菱水

6 鶴の羽音にあきむしのたつ (冬) 菱水

7 寄せて来る和歌の浦回の片男波 (冬) 菱水

8 ふり分け髪も肩過る頃 (冬) 菱水

9 左遷になげの情を打かこち (冬) 菱水

10 いづぞ晴なん雲の通路 (冬) 菱水

11 杉檜鬱蒼とした山嶺 (冬) 菱水

12 女人堂にてほどく麴桶 (冬) 菱水

13 夏も窮り二十九日の月瘦て (夏) 菱水

14 取りに来た燈に身をとかす虫 (夏) 菱水

15 法律の裏は潜れぬ世の中に (夏) 菱水

16 嘘も方便頓智即妙 (春) 菱水

17 玉莖も喜撰もきらず花盛り (春) 菱水

18 日永の椽に届く小包 (春) 菱水

(注) 3 三竿 竿三本つなぎあわせた程の高さの意。日月が空のかなり高い所にあること。4 四阿屋 東屋。7 片男波 赤人の「湯を無み」を片男波にこじつけてできた語。高い波。12 麴桶 麴桶のこと。

雲に入る鳥影写る潦
 館の糠干し白ひやがる
 船待に用なき町をあちこちと
 陽成院の御製かしこき
 年號もわかぬ碑唯一基
 落葉ちりはふ木枯のあと
 啼衛ちかきは汐のたるみ時
 兜脱がせて名を名乗せる
 入れ智恵の手筈狂うて笑はる
 王の逃場に角行の見て居る
 半部をぬるもをしき月夜さし
 金木犀の香り馥郁
 賑はしき御射山祭り蝶も出て
 簪たて、も往かぬ長酒
 真白な髭を薬師の自慢にて
 滑稽公とくたかけも呼ぶ
 幕串も花に障らぬ立處
 能の舞臺の飾り麗
 臨四夜事正月末、陽尾

- 19 潦 路上のたまり水。22 陽成院 第五十七代天皇。百人一首に「筑波嶺の峰より落つるみなな川恋ぞつもりて淵となりぬる」
- 20 館の糠干し白ひやがる
- 21 船待に用なき町をあちこちと
- 22 陽成院の御製かしこき
- 23 年號もわかぬ碑唯一基
- 24 落葉ちりはふ木枯のあと
- 25 啼衛ちかきは汐のたるみ時
- 26 兜脱がせて名を名乗せる
- 27 入れ智恵の手筈狂うて笑はる
- 28 王の逃場に角行の見て居る
- 29 半部をぬるもをしき月夜さし
- 30 金木犀の香り馥郁
- 31 賑はしき御射山祭り蝶も出て
- 32 簪たて、も往かぬ長酒
- 33 真白な髭を薬師の自慢にて
- 34 滑稽公とくたかけも呼ぶ
- 35 幕串も花に障らぬ立處
- 36 能の舞臺の飾り麗

(注) 明治四拾年十一月十六日満尾

(春) 水 菱 水 菱 水 菱
 (秋) 水 菱 水 菱 水 菱
 (冬) 水 菱 水 菱 水 菱
 全

四十年九月はじめ

鷺の巻

雪や小笹をうぐいすこぼる雪の音

幾隻も長閑な海に真帆曳いざなて

急がぬ旅に詩腸肥いそへたり

能い月夜古い狸も出て躍ぞとれ

影法師長き垣の鈍豆かげぼうしながかきかき

酔醜よひに又伯楽の泊り込み

魚ういに酔てあみの呪のろひし

柴特しばとくの愚痴も文殊の智恵なれや

さし合告る雪隠の咳あひつ

衛生えいせいも流行病に八ヶ間敷はちがまじき

此三伏は暑い只中このさんぶつはあついただなか

俯かたの月愛らしき兒の丸裸こころ

殉死じゆんし遂たるつれ合に泣な

繰返くりかへす賤の小手巻長々とせんのこたまきながなが

いつ止とどめたぞ灰汁補あかじの音ね

咲順さきじゆんもよし野の花の山深ののなやまふかき

四方よもの霞あの匂におふあけほの

池菱

嬉水

菱水

菱水

菱水

菱水

菱水

菱水

①6 鷺の巻 四十年九月はじめ

- 1 鶯や小笹をこぼる雪の音 (春) 池菱
- 2 きふとかはるけふの暖 (春) 嬉水
- 3 幾隻も長閑な海に真帆曳て (春) 菱水
- 4 急がぬ旅に詩腸肥へたり (春) 菱水
- 5 能い月夜古い狸も出て躍れ (秋) 菱水
- 6 影法師長き垣の鈍豆 (秋) 菱水
- 7 酔醜に又伯楽の泊り込み (秋) 菱水
- 8 魚に酔てあみの呪ひし (秋) 菱水
- 9 柴特しばとくの愚痴も文殊の智恵なれや (冬) 菱水
- 10 さし合告る雪隠の咳 (冬) 菱水
- 11 衛生えいせいも流行病に八ヶ間敷 (冬) 菱水
- 12 此三伏は暑い只中 (冬) 菱水
- 13 俯かたの月愛らしき兒の丸裸 (夏) 菱水
- 14 殉死じゆんし遂たるつれ合に泣 (夏) 菱水
- 15 繰返くりかへす賤の小手巻長々と (夏) 菱水
- 16 いつ止とどめたぞ灰汁補あかじの音 (春) 菱水
- 17 咲順さきじゆんもよし野の花の山深ののなやまふかき (春) 菱水
- 18 四方よもの霞あの匂におふあけほの (春) 菱水

(注) 柴特の愚痴も文殊の智恵 柴特の愚かさも文殊も智恵も相対的な差異でしかなく悟りの立場からみて同等であること。

陸北のふくまふまはに草花
 標標たふれけのふまふ
 代脈の滑稽に生脚より
 高と標をよいつ雷
 おさし世の途おも唯あふ
 冬をぬぬ川岸の波
 結立の島田に障る棒の尖
 坊主代りと遊た手荷物
 おろろえとと長き裸土手
 迅かすたゆまず喘ぎ行牛
 色づきし柿の梢に残る月
 後の裕の糊のこわさよ
 寄宿舎ももう此秋で二年越
 しと／＼雨のいつ晴るやら
 大沼は九十九の名たる島の数
 算盤なしのくらしぶりして
 盃の底まで匂ふ花の蔭
 胡蝶舞ふなり馬の鬣

全 水 菱 水 菱 水 菱 水 菱 水 菱 水 菱 水 菱 水 菱 水 菱 水 菱 全

12 三伏 夏の土用。夏の土用は初伏、中伏、末伏に分けられる。15 賤の小
 手巻 古代の布「倭文」を織るのに使う「苧環」。「練り返し」や「ひや
 し」の序詞に用いる。(「伊勢物語三十二」)

- 19 塩ののるからし菜漬に蓋させて (春)
- 20 搾り捨てたる乳汁の又はる
- 21 代脈の滑稽に皆臍をより (夏)
- 22 落て痕なきひとつ雷
- 23 むさし野の逃水も唯てのみにて
- 24 冬がれ知らぬ川岸の人波 (冬)
- 25 結立の島田に障る棒の尖
- 26 坊主代りと遊た手荷物
- 27 村端の見えても長き裸土手
- 28 迅かすたゆまず喘ぎ行牛
- 29 色づきし柿の梢に残る月 (秋)
- 30 後の裕の糊のこわさよ (秋)
- 31 寄宿舎ももう此秋で二年越 (秋)
- 32 しと／＼雨のいつ晴るやら (秋)
- 33 大沼は九十九の名たる島の数 (秋)
- 34 算盤なしのくらしぶりして (春)
- 35 盃の底まで匂ふ花の蔭 (春)
- 36 胡蝶舞ふなり馬の鬣 (春)

明治四十年十一月十六日満尾

(注) 21 代脈 脈は脈の異体字。代診。26 遊た 「言うた」の宛字。

夕さりや風ひや／＼と尾花散る
 月をうつして流れ行く水
 秋半答を迎ふる座ひらきに
 僅な垣もほめられにけり
 冬もまだ菊のいろ香をたのしみて
 進める杖もかるき小春日
 玉くしげ二見の浦の朝げしき
 借り人の多き遠眼鏡なり
 優しくも姉と妹の譲り合
 今やとときし在郷の弁
 命をば軍の場にさ、げつ、
 現世もいはず浮世も祈らず
 黙然と涼しい月を嬉しがり
 短夜ながらいつ更たやら
 来る筈の曾良も其角も未だ見えす
 丁稚走らす町の戻り通
 まださから詠め妙なる花盛り
 雲に入る鳥木に遊ぶ鳥
 玉くしげ 玉櫛筒 明け、ふた、おく、おおふなどの枕詞。10 今やとと
 きしは、「今やと説きし」「今や届きし」と両様に読める。

明治四十二年文音俳諧 ⑰ 「夕さりや」の巻

- 1 夕さりや風ひや／＼と尾花散る (秋) 閑窓
- 2 月をうつして流れ行く水 (秋) 池菱
- 3 秋半答を迎ふる座ひらきに (秋)
- 4 僅な垣もほめられにけり (冬)
- 5 冬もまだ菊のいろ香をたのしみて (冬)
- 6 進める杖もかるき小春日 (冬)
- 7 玉くしげ二見の浦の朝げしき (春)
- 8 借り人の多き遠眼鏡なり (夏)
- 9 優しくも姉と妹の譲り合 (夏)
- 10 今やとときし在郷の弁 (夏)
- 11 命をば軍の場にさ、げつ、 (夏)
- 12 現世もいはず浮世も祈らず (夏)
- 13 黙然と涼しい月を嬉しがり (夏)
- 14 短夜ながらいつ更たやら (夏)
- 15 来る筈の曾良も其角も未だ見えす (春)
- 16 丁稚走らす町の戻り通 (春)
- 17 まださから詠め妙なる花盛り (春)
- 18 雲に入る鳥木に遊ぶ鳥 (春)

今こそ拝まむ嵯峨の大念仏
 中能い隣持た仕合
 鍋は借り湯水は囉子一人住
 額と讀たり文字を書たり
 遙なる鋸山の薄曇り
 寒には入れとぬくき空相
 炬燵などいやがる爺の頭に
 内燈ですまぬ端下女の腹
 茂林寺の和尚の前も恥かしく
 おさる、雲に潜るくゞり戸
 月の影糸瓜のつるのはひ廻り
 置てはこぼす露の白玉
 酔醺漉の酔いをさましにあちこちと
 忘れた用をふと思ひ出す
 手を打てば池の魚の浮上り
 昔の寂の光る公園
 年々に植たす花も神の物
 かさす扇に暮遅き空
 嵯峨の大念仏 四月十一日から十五日まで京都嵯峨清涼寺釈迦堂でおこなう融通念仏会。十一、十三、十五の三日間は堂上で無言狂言を行う。
 鋸山 房総半島にある山。27茂林寺 群馬県館林にある曹洞宗の寺院。文福茶釜を所蔵すること名高い。

菱

19 今年こそ拝まむ嵯峨の大念仏

20 中能い隣持た仕合

21 鍋は借り湯水は囉子一人住

22 額と讀たり文字を書たり

23 遙なる鋸山の薄曇り

24 寒には入れとぬくき空相

25 炬燵などいやがる爺の頭に

26 内燈ですまぬ端下女の腹

27 茂林寺の和尚の前も恥かしく

28 おさる、雲に潜るくゞり戸

29 月の影糸瓜のつるのはひ廻り

30 置てはこぼす露の白玉

31 酔醺漉の酔いをさましにあちこちと

32 忘れた用をふと思ひ出す

33 手を打てば池の魚の浮上り

34 昔の寂の光る公園

35 年々に植たす花も神の物

36 かさす扇に暮遅き空

(春)

窓 菱

(冬)

(秋)

(秋)

(秋)

(春)

(春)

(注)

19 嵯峨の大念仏 四月十一日から十五日まで京都嵯峨清涼寺釈迦堂でおこなう融通念仏会。十一、十三、十五の三日間は堂上で無言狂言を行う。
 23 鋸山 房総半島にある山。27茂林寺 群馬県館林にある曹洞宗の寺院。文福茶釜を所蔵すること名高い。

明治四十一年文音施行

⑱「里近き」の巻

里近き山段々に笑ひ梟
軒場賑はずち、こ蒲公英
曳残る籬背負鶴の餌をまいて
前髪とれば扶持取になる
料理場の燈火薄き宵の月
箸をかえしてはちく痺

草の實の刃の音きく面白さ
今やしじまの行も満願
艶々とふり分け髪も肩過て
覗く井筒に写る兒花
礎はむかしくの長者あと
藪吹きぬいた風の涼しき
羅に裸小判の光る月
目出度葬に伽羅を熏らす
大沼を埋る噂も立消に
梅田堤は人絶のなき
17世に疎き耳にも早き花便り
巨燧ばなれもなりそうな春

種が傍の燈火薄き宵の月
箸をかえしてはちく痺

草の實の刃の音きく面白さ
今やしじまの行も満願

物とて打り分け髪も肩過て
覗く井筒に写る兒花

礎はむかしくの長者あと
藪吹きぬいた風の涼しき

羅に裸小判の光る月
目出度葬に伽羅を熏らす

大沼を埋る噂も立消に
梅田堤は人絶のなき

17世に疎き耳にも早き花便り
巨燧ばなれもなりそうな春

巨燧ばなれもなりそうな春

(春) 池菱

(春) かつミ

(秋)

(秋)

(秋)

(夏)

(夏)

(春) 菱

(注) 2つちこ 父子草。3 籬 ちような。10 兒花 兒||貌||顔。顔花。植物の名。昏顔、カキツバタなど諸説あり。美しい花の意とも。

野のみどりもらふ餅にも匂はせて
 大寺丈けに多い新発意
 ゆる／＼と巡る連なき初大和
 退屈まぎれ探る色廊
 川竹のふしぎの縁もあればある
 十年ぶりにあふ孫従弟
 塞翁が馬の仮令も立ながら
 呼べど叫べど来ぬ渡し守
 三日月の入て仕舞ば真の間
 膝に覚ゆる板椽の冷
 遠近に鳴くを心の虫しらみ
 價構はず書画をほしがる
 思はずも一足飛の補任沙汰
 どちが高いぞ比叡と鞍馬は
 見たことはないが啼たは佛法僧
 後架のともし明け近き色
 花の香の杖に通る宿かりて
 汁も鱈も春の香はしる

明治四十一年八月十一日満尾

(注)

20 新発意 新しく仏門に入ったもの。23 川竹 官許の郭以外の遊里の異名。「川竹の」は「ふし」「よ」「ながれ」にかかる枕詞。25 塞翁が馬 人間の禍福は変転し定まりのないものだというたとへ。34 後架 禪寺で僧堂の後ろに設けた手洗場。また、その傍に便所もあったことから、便所のこ

全 菱

唯夢より八月も

活らされて媚るでもなし桐の花
 四方ひらきに夏知らぬ庵
 蟹の眼の煮へ立つ湯気に水さして
 暮か、りたる海を見に行
 月の秋もの、実入も充分に
 まだ花ながら蕎麥の振舞
 参内の和尚を送る彼岸過
 夢で越けり薩摩峠も
 人目なき手話に泣つ、笑ひつ、
 立聞ぬ戸を覗く雪洞
 掛乞の懼れて戻る有体
 中さい霜も銀世界なり
 舟を待つ焚火ばち、勿ねる月
 冷をつき出す山寺の鐘
 荒立つといへば尾の上に目も離れず
 重石おかる、敷物の閑
 咲す、む花に賑ふ三軒家
 今や難波の芦も角組

明治四十一年八月はじめ
 ⑱「活られて」の巻

- 1 活らされて媚るでもなし桐の花 (夏) 秋香
- 2 四方ひらきに夏知らぬ庵 (夏) 池菱
- 3 蟹の眼の煮へ立つ湯気に水さして (夏) かつみ
- 4 暮か、りたる海を見に行 (秋) 香
- 5 月の秋もの、実入も充分に (秋) 菱
- 6 まだ花ながら蕎麥の振舞 (秋) 菱
- 7 参内の和尚を送る彼岸過 (秋) 香
- 8 夢で越けり薩摩峠も (秋) 菱
- 9 人目なき手話に泣つ、笑ひつ、 (秋) 菱
- 10 立聞ぬ戸を覗く雪洞 (秋) 香
- 11 掛乞の懼れて戻る有体 (秋) 菱
- 12 中さい霜も銀世界なり (冬) 菱
- 13 舟を待つ焚火ばち、勿ねる月 (冬) 香
- 14 冷をつき出す山寺の鐘 (冬) 菱
- 15 荒立つといへば尾の上に目も離れず (冬) 菱
- 16 重石おかる、敷物の閑 (春) 香
- 17 咲す、む花に賑ふ三軒家 (春) 菱
- 18 今や難波の芦も角組 (春) 菱

(注)
 11掛乞 掛取。12中さい 中祭。大祭に次ぐ祭り。歳旦祭、元始祭など。
 18角組 芦の生えて出る時は牛の角のよふである。組は芽ぐむの意。

二 度 風 呂 入 入 り 日 永 の 徒 然 に
 借 り て 見 や う か 膝 栗 毛 也
 大 名 へ 先 に 越 さ る 川 明 也
 扉 せ ま し と 昇 出 す 駕
 に こ ー と 笑 め る 姿 の 雲 の 峰
 恋 も 習 は ぬ 娘 美 し
 仮 名 文 字 に 和 歌 の 序 文 を 書 つ ら ね
 官 旨 使 い な す 細 道
 月 代 に 喜 撰 が 嶽 も 高 く 見 え
 辰 巳 来 る 冷 の 魁
 客 の 膳 先 初 鮭 で 間 に 合 せ
 障 子 の 穴 を 覗 く 影 ぼ し
 三 年 ぶ り 廿 五 菩 薩 刻 み 上
 実 に 勿 体 な や 恩 賜 ざ た と は
 耳 し る を 長 寿 の 相 と 誉 め ら れ て
 秘 蔵 の 硯 躬 垣 形 と や
 花 の 波 花 毛 氈 を 浸 す ら む
 真 火 飛 べ も ゆ る 若 芝
 和 書 の 硯 躬 垣 形 也
 借 り て 見 や う か 膝 栗 毛 也
 大 名 へ 先 に 越 さ る 川 明 也
 扉 せ ま し と 昇 出 す 駕
 に こ ー と 笑 め る 姿 の 雲 の 峰
 恋 も 習 は ぬ 娘 美 し
 仮 名 文 字 に 和 歌 の 序 文 を 書 つ ら ね
 官 旨 使 い な す 細 道
 月 代 に 喜 撰 が 嶽 も 高 く 見 え
 辰 巳 来 る 冷 の 魁
 客 の 膳 先 初 鮭 で 間 に 合 せ
 障 子 の 穴 を 覗 く 影 ぼ し
 三 年 ぶ り 廿 五 菩 薩 刻 み 上
 実 に 勿 体 な や 恩 賜 ざ た と は
 耳 し る を 長 寿 の 相 と 誉 め ら れ て
 秘 蔵 の 硯 躬 垣 形 と や
 花 の 波 花 毛 氈 を 浸 す ら む
 真 火 飛 べ も ゆ る 若 芝

- 19 二度風呂に入るも日永の徒然に
 - 20 借りて見やうか膝栗毛でも
 - 21 大名へ先に越さるる川明也
 - 22 扉せましと昇出す駕
 - 23 にこーと笑める姿の雲の峰
 - 24 恋も習はぬ娘美し
 - 25 仮名文字に和歌の序文を書つらね
 - 26 官旨使いなす細道
 - 27 月代に喜撰が嶽も高く見え
 - 28 辰巳から来る冷の魁
 - 29 客の膳先初鮭で間に合せ
 - 30 障子の穴を覗く影ぼし
 - 31 三年ぶり廿五菩薩刻み上
 - 32 実に勿体なや恩賜ざたとは
 - 33 耳しるを長寿の相と誉められて
 - 34 秘蔵の硯躬垣形とや
 - 35 花の波花毛氈を浸すらむ
 - 36 真火飛べもゆる若芝
- (注)
- 20 膝栗毛 徒歩で旅行すること。26 官旨の使いなす 勅旨の伝達をする使者を去らせる。追い払う。27 喜撰が嶽 京都府にある山。33 耳しる 耳が聞こえないこと。又、その人。34 躬垣 御垣。宮中、神社など神聖な場所の周囲にある垣。

照屋守一の月夜は寝惚水老
杖相はじめ跡文音張り

甚遠海也伝来時野老池水

何答めてか翡翠の飛

五六人野袴連の相むれて

出来た結句の詩を吟ずなり

打かはり星は移れど月さやか

寝もせで騒ぐ苗の雁鴨

あれこれと寶の市を見てお行

揚角きは何ぞさしたぞ

借着でもないに小袖の短くて

人目の関を忍ぶ身をうき

寄る波に右往左往のさぐれ石

雲吐晴れて牙渡る月

浮かれてか世を祭りてか鉢叩

余處の畑をぬける近道

此頃の出水に橋の落ちか、り

窓から内へほかす脱捨

散る花に酒も豆腐も賣きらし

替りては巢に通ふ親蜂

明治四十一年十一月札幌水老
遊杖相はじめ跡文音張り

池 菱
水 菱

(夏)
(秋)
(秋)
(秋)
(秋)
(秋)
(夏)
(秋)
(秋)
(冬)
(冬)
(冬)
(夏)
(春)
(春)

- 1 蓮咲や沼から晴る、朝曇り
- 2 何答めてか翡翠の飛
- 3 五六人野袴連の相むれて
- 4 出来た結句の詩を吟ずなり
- 5 打かはり星は移れど月さやか
- 6 寝もせで騒ぐ苗の雁鴨
- 7 あれこれと寶の市を見てお行
- 8 揚角きは何ぞさしたぞ
- 9 借着でもないに小袖の短くて
- 10 人目の関を忍ぶ身をうき
- 11 寄る波に右往左往のさぐれ石
- 12 雲吐晴れて牙渡る月
- 13 浮かれてか世を祭りてか鉢叩
- 14 余處の畑をぬける近道
- 15 此頃の出水に橋の落ちか、り
- 16 窓から内へほかす脱捨
- 17 散る花に酒も豆腐も賣きらし
- 18 替りては巢に通ふ親蜂

(注)
7 寶の市 十月十七日、大阪の住吉神社で行う市。枳市とも言う。13 鉢叩
き 十一月十三日の空也忌から大晦日までの四十八日間、

空也堂の僧が京都市内外を巡り歩いて竹の枝で瓢箪を鳴らして念仏和讃を
 唱えること。
 葬式の西日まばゆき夏隣
 頼まれのあるので酔糟も捨てられず
 俄分限の屋敷せまがる
 孔雀より鶯鶯正の五調子さ
 辻賣下の流行京極
 紫陽花は浮世のいろの七変化
 午眠の夢に天窓刺々る、
 隠密と見あらはされし残念さ
 黒門口の軍破れし
 東岱の雲よりもろき花吹雪
 永い三月の春も算へ日
 朝夕に種つけ川を見廻りて
 系図嘶しに力む権兵衛
 何時ぞ城の太鼓も聞外し
 盆後から又きつう逆上る
 降りぬいた跡の月夜の薄明り
 早稲も晩稲も十分の出来
 満尾

空也堂の僧が京都市内外を巡り歩いて竹の枝で瓢箪を鳴らして念仏和讃を唱えること。

19 葬式の西日まばゆき夏隣 (春)

20 頼まれのあるので酔糟も捨てられず

菱 水

21 俄分限の屋敷せまがる

22 孔雀より鶯鶯正の五調子さ

23 辻賣下の流行京極

24 紫陽花は浮世のいろの七変化

25 午眠の夢に天窓刺々る、

26 隠密と見あらはされし残念さ

27 黒門口の軍破れし

28 東岱の雲よりもろき花吹雪

29 永い三月の春も算へ日

30 朝夕に種つけ川を見廻りて

31 系図嘶しに力む権兵衛

32 何時ぞ城の太鼓も聞外し

33 盆後から又きつう逆上る

34 降りぬいた跡の月夜の薄明り

35 早稲も晩稲も十分の出来

36 満尾

注

23 解説が困難、一応の読みは書いたが自信なし。29 東岱 秦山の別名。五岳のうち東方にあるので此の名がある。31 種つけ 種浸し。

明後早も雪月七日は初瀬は秋
相はじめ以後文音興行

雪の巻

何ひとつ音せぬ雪の夜明かな
起れば岸も富貴なるもの
飼鳥も摺餅の恩に籠なれて
市日くを面白う待つ

月に着る裕羽織も出来上り
色の褪めぬを愛る篋
瀬に間に初瀬の彼岸の鈴の聲
一階の客も朝餉せかる、
手傳て奥庭も掃く車引
酔い物好きを慰めて居る
短冊の古歌を篋と大事がり

実にしき雲の彩り
月代に匂ふ青瓜真桑瓜
熱田祭りの人におさる、
崇高な塩煎餅を懐こりて
手招きすれば唾もうなづく
目表の花は大方咲揃ひ
雲に入る鳥水に入る鳥

短冊の古歌と篋と大事がり
月に着る裕羽織も出来上り
色の褪めぬを愛る篋
瀬に間に初瀬の彼岸の鈴の聲
一階の客も朝餉せかる、
手傳て奥庭も掃く車引
酔い物好きを慰めて居る
短冊の古歌を篋と大事がり
実にしき雲の彩り
月代に匂ふ青瓜真桑瓜
熱田祭りの人におさる、
崇高な塩煎餅を懐こりて
手招きすれば唾もうなづく
目表の花は大方咲揃ひ
雲に入る鳥水に入る鳥

明治四十年十一月六日此水觀來杖

相はじめ以後文音興行

雪の巻

1 何ひとつ音せぬ雪の夜明かな

2 起れば岸も富貴なるもの

3 飼鳥も摺餅の恩に籠なれて

4 市日くを面白う待つ

5 月に着る裕羽織も出来上り

6 色の褪めぬを愛る篋

7 瀬に間に初瀬の彼岸の鈴の聲

8 一階の客も朝餉せかる、

9 手傳て奥庭も掃く車引

10 酔い物好きを慰めて居る

11 短冊の古歌を篋と大事がり

12 実にしき雲の彩り

13 月代に匂ふ青瓜真桑瓜

14 熱田祭りの人におさる、

15 崇高な塩煎餅を懐こりて

16 手招きすれば唾もうなづく

17 目表の花は大方咲揃ひ

18 雲に入る鳥水に入る鳥

(冬)

池 娛
水 菱

(秋)

水

(夏)

(春)

菱 水

(注) 7初瀬 初瀬山の山腹に「長谷寺」がある。14熱田祭 六月十四日、近村から山ほこを出す。

文の公使迎る暖さ
 伝号の腕車絡繹
 虎や角と思の角の長短
 さし俯向て顔を懐
 良葉は水割さへもにがくし
 掛の鬼狂歌一つで追儼
 名も滑稽な寝ぼけ先生
 行列につき当りたる曲り角
 犬を叱て其場繕ふ
 そりや月は出たと手を打橋の上
 玉屋の花火さても格別
 伏兵もなきに乱る、厂の棹
 葉の埃りの道もせに散る
 天蚕賣旅から旅へかけ廻り
 男の子生れし追尾電報
 何處迄もしたしきものよ花と水
 てかひが光る春の後光
 四十二年五月満尾

水 全

- 19 交代の公使迎る暖さ (春)
- 20 伝号に吐腕車絡繹 (春)
- 21 虎や角と思の角の長短 (春)
- 22 さし俯向て顔を懐 (春)
- 23 良葉は水割さへもにがくし (冬)
- 24 掛の鬼狂歌一つで追儼 (冬)
- 25 名も滑稽な寝ぼけ先生 (冬)
- 27 行列につき当りたる曲り角 (冬)
- 28 犬を叱て其場繕ふ (冬)
- 29 そりや月は出たと手を打橋の上 (秋)
- 30 玉屋の花火さても格別 (秋)
- 31 伏兵もなきに乱る、厂の棹 (秋)
- 32 葉の埃りの道もせに散る (秋)
- 33 天蚕賣旅から旅へかけ廻り (秋)
- 34 男の子生れし追尾電報 (秋)
- 35 何處迄もしたしきものよ花と水 (春)
- 36 てかひが光る春の後光 (春)

(注) 20「腕車」 人力車。絡繹 人馬などが次々と続いて絶えないさま。21 思いの角 「角」の字を「かく」とよませて「思いを懸く」とも解することもできる。「つ」の「とよませて」「思い募る」の意と、女性の「嫉妬」の意と掛けていると解する。36 寝ぼけ先生 江戸中後期の狂歌師・戯作者太田南畝(一七四九—一八三三)の狂号。蜀山人・四方赤良の別号あり。36 てかひがは漢字を嵌めると、「手飼ひが」か。「てかてか光る春の汐先」とも読める。

明治四十二年文音興行

上州館林 荒井氏

②「魚の住む」の巻

魚の住む川へは遠き清水哉
暑さもここにさむる隈笹
瓦葺草葺屋根の飛々に
待てどくらせど豆腐屋は来ず
冷々と月は尾の上に澄渡り
重ね着してもとれぬ肌寒
連もなき貴船祭りの戻りかけ
聲かけられて潜る暖簾
爪弾の音じみも粋な裏二階
すがる願でもまとまらぬおり
竹藪を吹きぬく風のさらくと
青空高く影氷る月
年仕舞大蠟燭を立つらね
眼鏡の埃を幾度拭くやら
待得たる京の手紙の長々と
去来がおれば氣遣はなし
ひとふしはへらすつもりの花の杖
子寶だけに狭き雛棚

夏

(夏) 池菱

(夏) 閑窓

(秋)

(秋)

(秋)

(秋)

(秋)

(秋)

(秋)

(秋)

(秋)

(秋)

(秋)

(秋)

(秋)

(秋)

(秋)

(秋)

(秋)

(秋)

(秋)

(秋)

(注) 5 尾の上 ヲノウヘの約。峠や丘や山頂などなだらかな高地の上。
7 貴船祭 貴船神社の祭礼。六月一日。(九月九日との説もある。)

此の意圖も妙なる金屏風

行かふ人の行く所

入佛の式とて兒のねり出し

大八車沿寄せにけり

葉柳を夕風誘ふ川向ひ

寛々椽にすゝる冷麥

色白な一人娘を可愛がり

流行はか、ぬ金の指輪も

東台に江戸のけしきを見おろして

此頃稀な日本晴なり

住かへし庵に客する月の秋

どちら明けても早稲の香のくる

露霜に大山小山色しみて

野に放ちある牛のほち

写真器も旅の好みに携へし

命なりけり腰の瓢箪

時や今上々吉の花ざかり

雲薄すりと長閑なる春

明治四十一年十月満尾

菱 全

菱 全

19 北水の意圖も妙なる金屏風

20 行かふ人の行く所

21 入佛の式とて兒のねり出し

22 大八車沿寄せにけり

23 葉柳を夕風誘ふ川向ひ

24 寛々椽にすゝる冷麥

25 色白な一人娘を可愛がり

26 流行はか、ぬ金の指輪も

27 東台に江戸のけしきを見おろして

28 此頃稀な日本晴なり

29 住かへし庵に客する月の秋

30 どちら明けても早稲の香のくる

31 露霜に大山小山色しみて

32 野に放ちある牛のほち

33 写真器も旅の好みに携へし

34 命なりけり腰の瓢箪

35 時や今上々吉の花ざかり

36 雲薄すりと長閑なる春

明治四十一年十月満尾

(注)

19 金屏風 金屏風は冬の季語。ここは春の句にすべき所、冬にしたのは不審。27 東台 関東の台嶺(延暦寺)、即ち東叡山寛永寺。22 大八車 近世、江戸で用えた大きな荷車。發明者の名前を取って名付けたという。

菱 全

明治四十二年酉の四月上旬起

小樽区山の上町二十八番地旭旭風

②若竹の巻

雨音にまだ逆らわず今年竹
 昼の水鶏の叩く裏木戸
 敷島の果なき道に杖曳て
 今や出船と又呼に来る
 掘立の芋和らかに月の酒
 明日の日よりも定まりし露
 冷な肌障りなる下襦袢
 元禄風の流行る此頃
 界限に評判高き今小町
 穴守稻荷多い京講
 お仕置の跡ぞと聞けば物凄く
 橋銭さへも持たぬ懐
 月影も其俣池の薄氷
 葱雑炊に暖をとらばや
 可も可もなく五十年の長欠伸
 猫を描けば虎と見らるる
 皆花に包むで仕舞嵯峨御室
 人懐たつ踊念佛

(夏) 旭風

(夏) 池菱

(秋) 風菱

(秋) 風菱

(秋) 風菱

(秋) 風菱

(秋) 風菱

(秋) 風菱

(秋) 風菱

(秋) 風菱

(秋) 風菱

(秋) 風菱

(秋) 風菱

(秋) 風菱

(秋) 風菱

(秋) 風菱

(秋) 風菱

(秋) 風菱

(秋) 風菱

(秋) 風菱

(秋) 風菱

(秋) 風菱

(秋) 風菱

(秋) 風菱

(秋) 風菱

(秋) 風菱

(注)
 3 敷島 大和の国。さらに日本の別称、敷島の道とは歌道。
 10 穴守稻荷 東京羽田にある神社、祭神は豊受大神。開運招福の神。
 17 嵯峨お室 嵯峨・御室ともに京の桜の名所。18 句目には、春の季語が必要であるかない。

うかくと旅寝く（春）
 勿ね出しそな進物の鯛
 21 楽しみは酒に博奕に外ひとつ
 22 可愛がられて語る身の上
 23 ひとつとなく崩れつ欠けつ川の岸
 24 横ぎる蛇にはつと驚く（夏）
 25 行列の棹と成又鍵となり
 26 浮世の陰に逃て墨流
 27 仮初も頓に三年の繩階子
 28 寿命があれば死に死なれぬ（夏）
 29 青々と若葉の上を渡る月
 30 澤山な蚊の不足なりけり（夏）
 31 中央に伽羅くゆらする大廣間
 32 君の御感に入りし酒
 33 伯良が得たる衣の色は何
 34 見るもまばゆき東雲の空（春）
 35 花の宿毛氈貸すと筆太に（春）
 蝶去りもせず落付もせず
 明治四十二年五月満尾
 墨流 無差別・博愛・平和論を称えた戦国時代魯の思想家〓墨子の
 学派。33伯良 伯楽、馬喰、博勞。

時鳥の巻

引返せ海は果なし時鳥 旭池
 簾のいろも青き樓 旭池
 埃たつ街道筋を見おろして 旭池
 茶代といへどほむの投銭 旭池
 新わらの匂ふ筵も月の宴 旭池
 衣紋つくろふ襟のうそ寒 旭池
 うなよくと竹の撓める露霜に 旭池
 何を願ふてお百度をふむ 旭池
 右僕と茶屋の名に迄うたはれて 旭池
 焼て仕舞へと書てある弁 旭池
 仇波のたち騒ぐなる薩広潟 旭池
 囲爐裏にける風呂吹のなべ 旭池
 鎌よりも細き師走の二日月 旭池
 豆煎るやうな寄算の音 旭池
 銀行の破産の噂とり／＼に 旭池
 十針も縫ひしとはいかい怪我 旭池
 葬棺を花に遠慮の廻り道 旭池
 捨てた草履に登る陽炎 旭池
 右僕射(うぼくや)は右大臣の唐名

(略) 明治四十二年酉四月上旬文音張行

小樽旭旭風

②時鳥の巻

- 1 引返せ海は果なし時鳥 (夏) 旭池
- 2 簾のいろも青き樓 (夏) 旭池
- 3 埃たつ街道筋を見おろして (夏) 旭池
- 4 茶代といへどほむの投銭 (夏) 旭池
- 5 新わらの匂ふ筵も月の宴 (秋) 旭池
- 6 衣紋つくろふ襟のうそ寒 (秋) 旭池
- 7 うなよくと竹の撓める露霜に (秋) 旭池
- 8 何を願ふてお百度をふむ (秋) 旭池
- 9 右僕と茶屋の名に迄うたはれて (秋) 旭池
- 10 焼て仕舞へと書てある弁 (秋) 旭池
- 11 仇波のたち騒ぐなる薩広潟 (秋) 旭池
- 12 囲爐裏にける風呂吹のなべ (冬) 旭池
- 13 鎌よりも細き師走の二日月 (冬) 旭池
- 14 豆煎るやうな寄算の音 (春) 旭池
- 15 銀行の破産の噂とり／＼に (春) 旭池
- 16 十針も縫ひしとはいかい怪我 (春) 旭池
- 17 葬棺を花に遠慮の廻り道 (春) 旭池
- 18 捨てた草履に登る陽炎 (春) 旭池

(注) 9 右僕 右僕射(うぼくや)は右大臣の唐名。

乾花箱の潮の滴りし
 脊に振袖をむすび上げたり
 兄弟も子もなき乳母の飼殺し
 御慶事前の電話せわしき
 相生の契り久しき浦の松
 青田の戦ぎ心地よきなり
 佃煮を菜に水飯喰い返し
 縄暖簾にからむ鉢巻
 楽隊の音に驚く田舎馬
 大使の帰朝晴る、空癖
 首のべて月立待の三太夫
 秋としいへば風も実の入
 さまぐくに案山子姿の面白く
 実に目ざましき仮装運動
 金も又ある處にはありあまり
 園に擬したる五十三次
 行先も其行先も花と花
 詠めつさせぬ春の山川
 明治四十二年五月満尾

- 19 蛤の籠に潮の滴りし (春)
- 20 脊に振袖をむすび上げたり (春)
- 21 兄弟も子もなき乳母の飼殺し (春)
- 22 御慶事前の電話せわしき (春)
- 23 相生の契り久しき浦の松 (春)
- 24 青田の戦ぎ心地よきなり (夏)
- 25 佃煮を菜に水飯喰い返し (夏)
- 26 縄暖簾にからむ鉢巻 (夏)
- 27 楽隊の音に驚く田舎馬 (夏)
- 28 大使の帰朝晴る、空癖 (夏)
- 29 首のべて月立待の三太夫 (秋)
- 30 秋としいへば風も実の入 (秋)
- 31 さまぐくに案山子姿の面白く (秋)
- 32 実に目ざましき仮装運動 (秋)
- 33 金も又ある處にはありあまり (秋)
- 34 園に擬したる五十三次 (秋)
- 35 行先も其行先も花と花 (春)
- 36 詠めつさせぬ春の山川 (春)

(注)
 23 相生 相生えの松。仲のよい夫婦に例える。25 水飯 または乾飯を水に浸したるもの。水漬け飯。29 三太夫 貴族 大名など富貴の家で家事・会計を預かる男の通称。家令。家秩。執事。

大正丙寅極月下句より文音

丙寅

錦風

千日の苦をいッ時の相撲哉
鏡打抜く樽にさす月
備手網駒も貢を曠ぶりに
泊りく替る言の葉
夕立のむら乾きする庭の松
厨あたりの酢の香り来る
取込も愛度事は賑はしく
元の暦に巡り逢ふ年
めきくと門の榎の育けり
大西池の風に瞬く菱
うき人強う印地打たばや
さしつたり木酢一ツ葉隠れに
如何に入江に入り方の月
生れながらの僧でなき肌寒み
猫に小判よ万巻の書も
ゆとりある花見るまでに名を押して
漣清く春風の吹く

②「千日の苦」の巻

大正丙寅極月下句より文音

丙寅 錦風、池菱

- 1 千日の苦をいッ時の相撲哉 (秋) 錦風
- 2 鏡打抜く樽にさす月 (秋) 池菱
- 3 備手網駒も貢を曠ぶりに (秋) 菱
- 4 泊りく替る言の葉 (秋) 菱
- 5 夕立のむら乾きする庭の松 (夏) 菱
- 6 厨あたりの酢の香り来る (夏) 菱
- 7 取込も愛度事は賑はしく (夏) 菱
- 8 元の暦に巡り逢ふ年 (夏) 菱
- 9 めきくと門の榎の育けり (夏) 菱
- 10 大西池の風に瞬く菱 (夏) 菱
- 11 さはさりながら女扇のあり所 (夏) 菱
- 12 うき人強う印地打たばや (夏) 菱
- 13 さしつたり木酢一ツ葉隠れに (秋) 菱
- 14 如何に入江に入り方の月 (秋) 菱
- 15 生れながらの僧でなき肌寒み (秋) 菱
- 16 猫に小判よ万巻の書も (春) 菱
- 17 ゆとりある花見るまでに名を押して (春) 菱
- 18 漣清く春風の吹く (春) 菱

(注) 12印地打 五月五日大勢の子供が集まり、二手に分かれて石を投げあい合戦の真似をした遊び。13さしつたり よしきた。心得た。13木酢 なったまま熟し切った果実。

思はずも南祭に都入り
 大死急たり手作りの笠
 何事ぞ方一町の竹矢来
 ありしむかしの禄を其ま
 肖柏は柩を牛に曳かすらん
 名を雪消しにかりる宴
 その唄に尊き方の御落胤
 降るみならずみ五月雨の袖
 薫り来る風も媚く化粧坂
 地子もあがらぬ裏田甫なり
 月の洩るとや古御所の板庇
 身は浮き海松の家がらと虫
 三界の世を刈萱の野にくれて
 鉄砲鍛冶は物に剛情
 玄関に轉かした俣の櫻白
 秤にかける智恵と分別
 花散りて浅黄に返る峰の雲
 夏を隣にかろき栗鼠の子
 花散りて浅黄に返る峰の雲
 夏を隣にかろき栗鼠の子
 花散りて浅黄に返る峰の雲
 夏を隣にかろき栗鼠の子

- 19 思はずも南祭に都入り (春)
- 20 大死急たり手作りの笠 風
- 21 何事ぞ方一町の竹矢来 風
- 22 ありしむかしの禄を其ま、 風
- 23 肖柏は柩を牛に曳かすらん 菱
- 24 名を雪消しにかりる宴 風
- 25 その唄に尊き方の御落胤 菱
- 26 降るみならずみ五月雨の袖 風
- 27 薫り来る風も媚く化粧坂 菱
- 28 地子もあがらぬ裏田甫なり 風
- 29 月の洩るとや古御所の板庇 (秋)
- 30 身は浮き海松の家がらと虫 (秋)
- 31 三界の世を刈萱の野にくれて (秋)
- 32 鉄砲鍛冶は物に剛情 風
- 33 玄関に轉かした俣の櫻白 菱
- 34 秤にかける智恵と分別 風
- 35 花散りて浅黄に返る峰の雲 (春)
- 36 夏を隣にかろき栗鼠の子 (春)

(注) 19南祭 京都石清水八幡宮の臨時祭。陰曆三月の午の日に行われた。21方一町の竹矢来。一町四方の竹矢来。竹矢来とは竹を縦横に粗く組合せて作った囲ひ。23肖柏 室町中期の連歌師牡丹花肖柏(一四四三〜一五二七)。28地子 広く言ひば借地料や田租のこと。

後い池菱

多岐うあま

大正十五年五月月中旬はじむ

藤六、池菱
両吟 文音

大正十五年五月月中旬はじむ

②6 「窓の日」の巻

窓の日は海に燕飛交

長い小路を燕飛交

借白に雛の節句の餅搗て

川の明たと觸れ廻るなり

片先の小鬢を月に照らされて

薄い紅葉の遠まさりして

漸寒み鳴瀧祭近づきし

髪そりあげてほくろ見らる、

辻占のあたりし事の口惜く

1 窓の日の腕に海の聞きけり (春) 藤六

2 長い小路を燕飛交 (春) 池菱

3 借白に雛の節句の餅搗て (春) 六菱

4 川の明たと觸れ廻るなり (春) 六菱

5 片先の小鬢を月に照らされて (秋) 六菱

6 薄い紅葉の遠まさりして (秋) 六菱

7 漸寒み鳴瀧祭近づきし (秋) 六菱

8 髪そりあげてほくろ見らる、 (秋) 六菱

9 辻占のあたりし事の口惜く (秋) 六菱

(注)
7 鳴瀧祭 九月二十八日京都西山鳴瀧の鎮守、福王子宮(宇多帝の母后を祀る)の祭礼。福王子祭。

江戸の老舗
 電燈の月夜
 辞世 千代
 池菱



▷ 全盛期の⑤ 中島商店



△ 鎌田池菱

昭和五年庚午年一月上旬

埼玉縣大里郡大寄村

茂木杜香
鎌田池菱

雜煮の巻

杜香

箸ありり木杵杵羅惹哉

書も解れ、白粉も音池菱

楓の尾の下に外山の標

あはれと送る人、そはつく

十六夜の月もいざよふ隙もなき

去る燕入替雁

休て飲つて諸味の頭に上り

布施も衣も置き忘れたり

負た碁の腹いせかしら長尿

御輿廊下絹ずれの音

逢ながらしみ話す折もなし

唸りも引かぬ短夜の鐘

蚤一ツ船から海へほかす月

南無阿弥陀仏

病む老の脊筋さすればすやくと

どたりと壁の落る古家

今日の花昨日の雨に色栄えて

どちら向ても酹の春

妻戸家の端に設けた両開きの戸。3外山山の端を言う。

諸味とぶろく。13ほかす捨てる。うつちやる。

昭和五年庚午年一月上旬

埼玉縣大里郡大寄村

文音両吟

茂木秋香
鎌田池菱

⑳ 雜煮の巻

1 箸あたりよき木の椀の雜煮哉

2 妻戸明ければ匂ふ梅が香

3 楓の尾の下に外山の並ぶらむ

4 出船を送る人のそはつく

5 十六夜の月もいざよふ隙もなき

6 去る燕入替雁

7 ウ侮て飲んだ諸味の頭に上り

8 布施も衣も置き忘れたり

9 負た碁の腹いせかしら長尿

10 御輿廊下絹ずれの音

11 逢ながらしみ話す折もなし

12 唸りも引かぬ短夜の鐘

13 蚤一ツ船から海へほかす月

14 南無阿弥陀仏

15 病む老の脊筋さすればすやくと

16 どたりと壁の落る古家

17 今日の花昨日の雨に色栄えて

18 どちら向ても酹の春

(春) 秋 香

(春) 池 菱

(春) 香

(春) 菱

(秋) 香

(秋) 菱

(秋) 香

(秋) 菱

(春) 香

(春) 菱

(夏) 香

(夏) 菱

(夏) 香

(夏) 菱

(春) 香

(春) 菱

(春) 香

(春) 菱

暮遅き濱に美し蜃気楼
 臍の緒切て以来の興
 失敗の夜逃不図して玉の輿
 筆の持てぬをくやしがるる、
 待たれたる高麗の聘使の通られて
 貢は虎の皮が千枚
 右に巻く曆も残り二三寸
 厄介ながら厄を拂はず
 息のあるうちに棺桶こしらはせ
 岩の狭間を迂る水音
 更け／＼て月に物いふ一人住
 馴れて河鹿の籠にひよる
 見渡せば打端もなき広庭
 此川北は最上領分
 国替の小荷駄に駄の狭められ
 野良から上た馬の刎合
 背戸の花居湯の中へ散り込みて
 振分け髪の揃う雛の間
 背戸の所為の菱
 振分け髪を揃う雛の間

- 19 暮遅き濱に美し蜃気楼 (春)
- 20 臍の緒切て以来の興 (春)
- 21 失敗の夜逃不図して玉の輿 (春)
- 22 筆の持てぬをくやしがるる、 (春)
- 23 待たれたる高麗の聘使の通られて (春)
- 24 貢は虎の皮が千枚 (冬)
- 25 右に巻く曆も残り二三寸 (冬)
- 26 厄介ながら厄を拂はず (冬)
- 27 息のあるうちに棺桶こしらはせ (夏)
- 28 岩の狭間を迂る水音 (夏)
- 29 更け／＼て月に物いふ一人住 (夏)
- 30 馴れて河鹿の籠にひよる (夏)
- 31 見渡せば打端もなき広庭 (菱)
- 32 此川北は最上領分 (菱)
- 33 国替の小荷駄に駄の狭められ (菱)
- 34 野良から上た馬の刎合 (菱)
- 35 背戸の花居湯の中へ散り込みて (春)
- 36 振分け髪を揃う雛の間 (春)

(注)
 29 句目、夏の季語欲しい個所。例えば上五に「暑いなど」とか「涼しとか」を入れる。23 小荷駄 馬に背負わせる雑多な荷物。34 刎合 刎ほうり出す。はじきとばす。35 背戸 家の裏口。「居湯」釜を取りつけずに、ほかで沸かした湯を湯船に移し入れる風呂。

五
清
雅
帖
外
解
讀

剃刀を暫しとめてはとき
お花

お花をさしたるあきの風
お花

よみのおきしと薄さすらむ
池菱

上塗の土さらりと薄さすらむ

世話役衆の折に見まはる

照達し色の和らく薄月夜

うら表から早稲の香の来る

米かい沙汰を探ねしながら

是みよとばかりにアツき髭を撫で

横に車を押しときはおす

全盛は食盛だけに張つよく

見返り柳振りかゝるなり

霜の月明さ連れて白々と

うなりを引て時の鐘なる

請合て医者と言葉を真に請て

瓢の紐を付かえておく

初花の便り西より東より

糸遊からむ野宮の幣

見返り柳 日本堤から吉原遊廓の大門に下る衣紋坂にあった柳。朝帰り

(略) 明治三十二年夏於蜂庵興行
⑧ 歌仙「剃刀を」の巻

1 剃刀を暫しとめてはときとぎす

2 敷もの捲る若竹の風

3 上塗の土さらりと薄さすらむ

4 世話役衆の折に見まはる

5 照達し色の和らく薄月夜

6 うら表から早稲の香の来る

7 ウラ 俎板もぬらさぬ沙魚の小料理に

8 米かい沙汰を探ねしながら

9 是みよとばかりにアツき髭を撫で

10 横に車を押しときはおす

11 全盛は食盛だけに張つよく

12 見返り柳振りかゝるなり

13 霜の月明さ連れて白々と

14 うなりを引て時の鐘なる

15 請合て医者と言葉を真に請て

16 瓢の紐を付かえておく

17 初花の便り西より東より

18 糸遊からむ野宮の幣

(注)

12 見返り柳 日本堤から吉原遊廓の大門に下る衣紋坂にあった柳。朝帰りの遊客がここで名残り惜しげに振り返ったのでいう。

(夏) 採花
(夏) 対几
(秋) 池菱

(秋)

(冬)

(春) 花
(春) 几
(春) 菱

野の空に花の影をうつし

木曾の園をたたくは

花の影をうつし

花の影をうつし

花の影をうつし

花の影をうつし

花の影をうつし

花の影をうつし

花の影をうつし

花の影をうつし

花の影をうつし

花の影をうつし

花の影をうつし

花の影をうつし

花の影をうつし

花の影をうつし

花の影をうつし

花菱几

19 オ 鶉とも化せて鼠のちよろくと

20 竹筒の酒をしこみ切る頃

21 翌日の空どうちやと宿を出て見る

22 落来る水もさすが天竜

23 馬士の渡世には似ぬ正直さ

24 観音さまの御札いたゞく

25 薄ものの袖には腹をかくしかね

26 青梅好となつて温泉戻

27 無造作な小休茶屋の縄がとけ

28 もの乞ふ猿の辞ぎばかりする

29 行燈を消さする迄の月夜さし

30 残る暑さも最そつとの中

(秋)

31 ナウ 是ほどの栗の林を一手持

32 いそがしいのに大宮司の宿

33 切ぎれと袴付たる賃卦さ

34 数をかぞへてわたす幕串

35 いつしか鞍馬の山も花の雲

36 草のかけさへ永日のあし

(注) 33賃卦 劣っているさま。35鞍馬の山 京都の鞍馬山。火祭り知られる。

花菱几

明徳も明らかなれや初日影

民をあらたに向う喰積

切れて行く風鳶は丘隅に止りて

性は善なり恩を知る犬

晴渡る月や彼の淇の澳もなき

菜竹猗々と置ける白露

其苗の碩に神の實して

江戸見物の事毎に問ふ

仮住の奢らんよりは筵張り

富貴にありて又もほしがる

父母在すうちに金蔵空にすな

深川限り遠く遊はず

憂き事は隠れたるより顕れて

暴虎憑河で祭する時

鳶飛で油揚天に登るなり

疏食を食ふ木食の道中

樂しみはかた／＼よらず月と花

日々新たに萌る若草

29 大學之連歌

1 明徳も明らかなれや初日影 (春)

2 民をあらたに向う喰積 (春)

3 切れて行く風鳶は丘隅に止りて (春)

4 性は善なり恩を知る犬 (春)

5 晴渡る月や彼の淇の澳もなき (秋)

6 菜竹猗々と置ける白露 (秋)

7 ウラ 其苗の碩に神の實して (秋)

8 江戸見物の事毎に問ふ (秋)

9 仮住の奢らんよりは筵張り (秋)

10 富貴にありて又もほしがる (秋)

11 父母在すうちに金蔵空にすな (秋)

12 深川限り遠く遊はず (秋)

13 憂き事は隠れたるより顕れて (秋)

14 暴虎憑河で祭する時 (夏)

15 鳶飛で油揚天に登るなり (夏)

16 疏食を食ふ木食の道中 (春)

17 樂しみはかた／＼よらず月と花 (春)

18 日々新たに萌る若草 (春)

定て能く静なり春の雨
 君君たらむ猪牙の大名
 讀れたる鼻毛も賢は賢として
 浩然の氣を茶事で養ふ
 繪の事は素人になれぬ筆の艶
 瀬田と矢橋の百歩五十歩
 牛を見て羊を見ざる高繩手
 鷹野の鶴の不幸短命
 此人にして斯病あり泣上戸
 己に克て灸をこらゆる
 魚淵に躍る八幡の月今宵
 邦畿千里を越る初雁
 己に見て灸をこらゆる
 奥剛に躍る八幡の月今宵
 邦畿のやうな秋の初雁
 民具に爾を見るは勝相撲
 其争や不時の物揚げ
 咄をするなかならず隣あり
 箆食壺醬で袖かけきらめく
 禮の用は和して楽しむ花の下
 仰げば高き君が代の春

19 定て能く静なり春の雨 (春)

20 君君たらむ猪牙の大名

21 讀れたる鼻毛も賢は賢として

22 浩然の氣を茶事で養ふ

23 繪の事は素人になれぬ筆の艶

24 瀬田と矢橋の百歩五十歩

25 牛を見て羊を見ざる高繩手

26 鷹野の鶴の不幸短命

27 此人にして斯病あり泣上戸

28 己に克て灸をこらゆる

29 魚淵に躍る八幡の月今宵

30 邦畿千里を越る初雁

31 民具に爾を見るは勝相撲

32 其争や不時の物揚げ

33 咄をするなかならず隣あり

34 箆食壺醬で袖かけきらめく

35 禮の用は和して楽しむ花の下

36 仰げば高き君が代の春

(春) (春) (秋) (秋) (秋) (冬) (春)

(注)

2 「喰積」正月の重詰料理。3 「綿蜜たる黄鳥、丘隅に止まる」出典は詩經・小雅。5 「彼の淇澳を瞻るに蓼竹猗々たり」出典は大學。淇澳は河南省の淇という川の屈曲した所。蓼竹はイネ科の多年草カリヤ。猗猗は植物がなよなよ美しく靡くさま。7 「其の苗の碩いなるをすること莫し」出典は伝八章。10 「富貴天に在り」出典は論語・顔淵。11 「父母在すときは、遠く遊ばず」出典は論語・里仁。

13 「隠れたるより見はるるは莫し」出典は中庸。14 「暴虎憑河」出典は論語・述而。15 「鳶飛んで天に戻り、魚淵に躍る」出典は詩經・大雅。16 「蔬食を飯ひ：中略：樂しきは亦其中に在り」出典は論語・述而。18 「苟に日に新たに、日々に新たに又た日の新たなり」出典は伝二章。20 「君君たり、臣臣たり」出典は論語・顔淵。22 「浩然の氣を養ふ」出典は孟子・公孫丑上。23 「繪の事は素（しろ）きを後にす」出典は論語・八佾。24 「五十歩百歩」出典は孟子・梁惠王上。25 「羊を以て牛を易ふ」出典は孟子・梁惠王上。26 「不幸短命にして死せり矣」出典は論語・雍也。27 「斯の人にして斯の疾有り」出典は論語・雍也。

28 「己れに克ちて礼に復る」出典は論語・顔淵。29 「魚淵に躍る」出典は詩經・大雅。30 「邦幾千里、維れ民の止まる所」出典は詩經・商頌。30 「民具に爾を瞻る」出典は詩經・小雅。32 「其争也君子」出典は論語・八佾。33 「徳は孤ならず、必ず隣あり」出典は論語・里仁。34 「簞食壺漿」出典は孟子・梁惠王上、竹製の食器に盛った飯と壺に入れた飲物。35 「礼之用和爲貴」出典は論語・学而。36 「仰之彌々高」出典は論語・子罕。

(特記)

「大學」は儒教の古典四書の一。此の巻では、發句から四句目迄に大學の三種類（明明徳・親民・止至善）を配し、五句目以降、儒教の古典名句を呼べば、應へる如く、才氣煥發打打發止と續けてゆくのはさすがである。（窪田薫）

③〇「扇」の巻

- 1 目にしたつや団扇の中の白扇
- 2 ふくさひらけば匂ふ青ざし
- 3 石積だやうに泥亀重りて
- 4 ここはむかしの城のあととなり
- 5 山の端に月の入るまでふらくと
- 6 からねばならぬ粟の赤らみ
- 7 水いろも秋の流れとなりすまし
- 8 間の宿まで泊りこぼるる
- 9 身延へも廻る積りの夫婦つれ
- 10 炎の崩れわる痒きもの
- 11 板庇打ぬきさうな玉あられ
- 12 闇はあやなし困の窓
- 13 憂き人に昏の礫を投付る
- 14 無事愛婚も姉は姉たけ
- 15 剃刀はかられていつも家になし
- 16 雫のたるる紐を干しけり
- 17 狭むしろの埃りを拂ふ花と月
- 18 寝迷ふ鳥も春の夕榮

池 菱
採 花

(注)

2 青ざし 青差。茶の名。青麦のもやしを煎つて作る。10 灸 (ヤキト) 焼所)の音便形。灸(きゅう)。やいと。12 あやなし 文無し。模様がない。わけが分からない。

- 19 椀の蓋とれば蕨の香に立て
 - 20 三百安の孫の我がま、
 - 21 物好きにきれも古代の髭袋
 - 22 鉢の魚にも養老の水
 - 23 来合せて曼茶羅拜むむし干に
 - 24 百日紅の咲き盛る寺
 - 25 大釜を遣はねと折に磨かせて
 - 26 年は寄ても物を忘れぬ
 - 27 字典にはなひといはるる字の形
 - 28 架かへたれど矢張反橋
 - 29 突あげたやうにほっかり登る月
 - 30 俄料理にほしき鱸の芽
 - 31 新綿の手金渡らす折仕舞
 - 32 縁はいなもの遠い處へ
 - 33 娘とは云へども実は御主筋
 - 34 保命酒とはさくも愛度
 - 35 待くらす花の道順西ひがし
 - 36 陽炎燃る三輪の馬場先
- (注) 20 三百安 「三百」は三百文、つまり価値が低い意。28 反橋 中央の反り橋。36 三輪 奈良県にある地名。三輪神社で有名。

由 油のうらみ牡丹哉 採花

扇を捨ふ飛石のちり

茶の水を汲に四五丁はしらせて

又降さうな山の雲脚

畳まで月の雫にしつとりと

鯿とはよき料理なりけり

茸狩の草臥がまだぬけきらず

いなば葉師へ立る代参

風呂おけを漸醫者にゆるされて

紙燭ともして雨もりを見る

木兎のねぐらは門の古指

どこへ行荷か仰山な雪車

一大事にはしつたは酒のとが

呼ぬ禿のへんじして来る

片よせて置いてはあれどみだれ箱

おほろはなて冴かへる月

花の雪ちらりく とこぼれかけ

筏ながしの唄も長閑に

③ 牡丹の巻

對唸

1 風よけに袖のちいさき牡丹かな

2 扇に捨ふ飛石の塵

3 茶の水を汲に四五丁はしらせて

4 又降さうな山の雲脚

5 畳まで月の雫にしつとりと

6 鯿とはよき料理なりけり

7 茸狩の草臥がまだぬけきらず

8 いなば葉師へ立る代参

9 風呂おけを漸醫者にゆるされて

10 紙燭ともして雨もりを見る

11 木兎のねぐらは門の古指

12 どこへ行荷か仰山な雪車

13 一大事にはしつたは酒のとが

14 呼ぬ禿のへんじして来る

15 片よせて置いてはあれどみだれ箱

16 おほろはなて冴かへる月

17 花の雪ちらりく とこぼれかけ

18 筏ながしの唄も長閑に

採花
池菱

大釜を並べて飯を焚たきぐし 花

先祖祭りは身のまつりとや

放してもきうには飛ぬ籠の鳥

花

弟の利發誰に似たやら

木のもとを玉のうてなの田草とり

とッけて呉る筈の掛香

垣結ふてへだてぬ隣遠くなり

遣ふあてある紙鹽の鯛

印籠を親重代と撫でさすり

弓矢すてしは幾むかしあと

湖に昼の月影ありありと

時しり貌に紅葉する鮎

若禮草好もきらいもころにて

扱ひにくきくるま長持

早打もきのふとけふで三度四度

奈古會の關も今は名のみに

峰ふもと曙のおなじ花盛り

春の餘波の行渡る色

19オ 大釜を並べて飯を焚たきぐし

20 先祖祭りは身のまつりとや

21 放してもきうには飛ぬ籠の鳥

22 弟の利發誰に似たやら

23 木のもとを玉のうてなの田草とり

24 とッけて呉る筈の掛香

25 垣結ふてへだてぬ隣遠くなり

26 遣ふあてある紙鹽の鯛

27 印籠を親重代と撫でさすり

28 弓矢すてしは幾むかしあと

29 湖に昼の月影ありありと

30 時しり貌に紅葉する鮎

31 若禮草好もきらいもころにて

32 扱ひにくきくるま長持

33 早打もきのふとけふで三度四度

34 奈古會の關も今は名のみに

35 峰ふもと曙のおなじ花盛り

36 春の餘波の行渡る色

大根の花咲り如静一 池菱

水のぬるみて浮上る泡

陽炎の眼がねはげせば遠過て

呑加減にて素湯をうまがる

きら／＼と鎌の柄光る月影に

ひやつき早き筈と北うけ

鬼燈を袂みやげにつかみひし

暖簾かけて運ぶ店つき

からくりも糸ひく筋の操に

嫁入といわで隙ねがひ込

盗まれし大角豆に垣の詮もなし

濡色ふかきみじか夜の月

澗川をのぼる船うた幽にて

赤玉くすり腹痛にきく

面小手をこれ見よがしに肩にかけ

無筆といへど遣教は讀む

常盤木も花のくもりに包まれて

汐のみち干も弥生の空

③2 鯉鱗行「大根之花」の巻

兩吟

池菱
採花

- 18 常盤木も花のくもりに包まれて
- 17 汐のみち干も弥生の空
- 16 無筆といへど遣教は讀む
- 15 面小手をこれ見よがしに肩にかけ
- 14 赤玉くすり腹痛にきく
- 13 澗川をのぼる船うた幽にて
- 12 濡色ふかきみじか夜の月
- 11 盗まれし大角豆に垣の詮もなし
- 10 嫁入といわで隙ねがひ込
- 9 からくりも糸ひく筋の操に
- 8 暖簾かけて運ぶ店つき
- 7 鬼燈を袂みやげにつかみひし
- 6 ひやつき早き筈と北うけ
- 5 きら／＼と鎌の柄光る月影に
- 4 呑加減にて素湯をうまがる
- 3 陽炎の眼がねはげせば遠過て
- 2 水のぬるみて浮上る泡
- 1 大根の花咲日如静也

寒食を餘所にわたらくつぶら家
 勅使迎へる道の盛砂
 養老と年号までも改り
 達者な足に不自由な耳
 風呂吹に呼ばるる当の雪見して
 だまされて咲く室の紅梅
 神々を誓し中も絶々に
 ひきあげかねる水底の鐘
 のつそりと仕事休みのふところ手
 坂木を打ておとす鬚太
 裏表月の掃除の行くとき
 鴨上戸わがま、に這ふ
 湯あがりにはじめて風もうそ寒く
 襖あければ太き軸もの
 字典でもわからぬ文字問に来て
 五十集の辨に買置る雑魚
 35 綻る花もはつある山麓
 36 蝶もふりしか明方の雨
 (注)
 「鯉鱗行」 歌仙の別名。鯉の鱗が頭から尾にかけて一条三十六枚あると
 いうことから。
 池菱が上京した折りの両吟で、明治二十九年頃と思はれる。当時、採花女
 は女性では一流の俳人であった。
 初出 俳諧集『平成元年のモザイク』窪田薫。平成二年。

菱 花

菱 花

③③ 脇起鯉鱗行「梅が香に」の巻

- 1オ 梅が香にのつと旭の出る山路哉
 2 残る言葉のほふ春風
 3 髻髪らが雲雀笛吹頃なれや
 4 飲加減なる白湯をうまがる
 5 くら／＼とさゞ波光る月影に
 6 冷えつきはやき里の北うけ
 7ウ 御所柿を袂みやげに用意して
 8 氣はたらきさへ違ふ世わたり
 9 機たつる糸もすなほな丸額
 10 嫁にゆくともいわで隙とる
 11 盗まれし大角豆に垣の詮もなし
 12 ぬれ色ふかきみじか夜の月
 13 澗川を登る船唄かすかにて
 14 腹痛ならば赤玉がきく
 15 面ノ小手のふた、ひ時にあひぬらし
 16 おぼつかなげに遺教は讀む
 17 常盤木ののんどりつ、む花曇
 18 潮の満干も彌生なりけり

祖翁 以孝 江雪 石江 若水 西史 静里 池菱 戸方 松僊 柳蛙 桂舟 桃下 蟻卵 苔石 幾石 露光 娥仙

- 19^ナ 寒食も他所に藁焚くつづら家
 20 勅使迎へる道のつくひ
 21 養老のめでたきためし語るらん
 22 眼と齒はよいが耳の不自由
 23 風呂吹に呼ばる、あての雪見にて
 24 晝出た木兎のなふられて居る
 25 神かけて誓し中も絶々に
 26 ひきわづらへる思ひ幾筋
 27 往て戻る莫休に薬研堀
 28 板木打たら犬のおどろく
 29 裏おもて月の掃除のよく届き
 30 鴨上戸我がま、に這ふ
 31^ナ 湯あがりにかめし秋をおぼえける
 32 襖あければ澤庵の筆
 33 蔵建て戌亥へ庭をとり廣げ
 34 晴わたりたる雨のきれいさ
 35 十ヲあまり二人居並ぶ花筵
 36 かのなつかしき蝶鳥の夢
- (注)
 30 鴨上戸 ナス科の蔓性多年草。液果は球形で赤く熟し、ヒヨドリが好むという。秋の季語。「赤い実がひよを上戸にしたりけり一茶」。初出『石狩俳壇誌』前川道寛北海道教育社昭和六十年。明治三十五年発行『尚古集』から

與信 東洋 黄樹 拜山 松山 樂山 露蕉 江雪 石江 若水 桃下 娥仙 桂舟 松僊 戸方 以孝 池菱

あとがき

前川道寛

連句の解説がこれほど難しいものとは思いませんでした。しかしそれだけ難しい文字が解けたとき、内容がわかったとき、喜びも一入のものがありました。

先に『石狩俳壇誌』を書くおり、解説については高倉新一郎先生や谷沢尚一先生それに地元の先輩長谷川嗣氏に教えられて、今思えば大変幸運であったと思います。

この度はこうした方々は他界されたり、遠隔の地にあつたり、その上連句には矢張り俳句とは違った難しさがあり辞典や参考書と首っ引き、それでも判らないものが多く年月ばかり経って行きました。そんな折り、札幌市在住の嘗てのノモンハンの戦友辻山三郎氏（元道新旭川販売部長、のち、札幌の教育新潮社編集責任者）が古文書に明るいことを知り大変助けられました。また、とくに難しい一字一句については道文書館の佐藤京子課長さんや札幌教育大学の君教授を訪ねて教えを受けたり、仙台市の谷沢尚一先生にお尋ねしました。お陰でこの池菱の「清雅帖」について一応の解説を行うことができました。

しかし、連句としての語調を整えることは素人の私にはできず、この面の振り仮名については元北海道東海大学教授窪田薫先生に全面的協力をして戴き大いに助かりました。

また、先生には単に振り仮名ばかりではなく、石狩に埋もれていた連句の貴重さも教えられました。この度の出版の原動力ともなった方と言えましょう。

さらに資料については、池菱の三代目中島勝人氏及び四代目勝久氏の御好意に預かるものです。また、最初に中島家の俳句資料を紹介して下さったのは畏友花川の了恵寺住職高木憲了師でした。

さて田中郷土研究会長さんをはじめ知ったのは、今から四十年程前のことでした。当時の田中さんは石狩町農業改良普及所長をしておられました。私は兼業農家をしていました。

ある農業講習会の時でした。私の質問に対して、その説明が的確で、親切で博学さを知り以来長い交流をさせて貰い公私の面で助言指導を受けるようになりました。その後役場に入られ企画課長時代、町史年表を発行されました。私が中島家の俳句資料を知ったのはこの時代です。

この時、田中さんは石狩に文学資料は無いと言われました。この言葉が私の俳句資料研究の魁となりました。そして俳句史を書く上で唯一の参考書がこの『石狩町史年表』でした。何回この年表史を読んだことか、今ボロボロになっている本、感慨深いものがあります。

今回の出版も私は高齢で専ら粗筋の解説のみにて、全般的気配りは田中会長さんの御世話になりました。

また、町教育委員会の石橋孝夫氏には日頃から何かと御指導を受けていますが、今回も会長さんを通して大変多くの御苦勞を頂きました。

思えば長い年月にあつて郷土研究会の皆様を始め随分と多くの方々に激励の御言葉や御助言、御指導を頂きました。今改めて、これ等皆さまにお礼申します。

最後にこうした立派な文化遺産を残していかれた郷土先人達の偉大な功績を皆さまと共に誇りとも励みともしていきたいと思えます。

平成八年二月吉日

前川道寛
まえかわみちひろ

一九一三（大正二）年、石狩町大字生振村に生まれる。

臨済宗大学卒業。同村の妙法山春光寺住職。

石狩町社会教育委員、文化財保護委員など歴任。石狩町郷土研究会顧問。

受賞―石狩管内教育実践奨励賞、石狩町教育文化功労表彰。

著書―『石狩町俳句小史』『石狩俳壇誌』ほか研究発表多数。

住所―石狩町大字生振村三線北

窪田 薫
くぼた かほる

一九二四（大正十三）年、函館市に生まれる。

第二高等学校、京都帝国大学理学部、北海道大学文学部を各卒業。

東海大学教授を経て現在、連句協会理事、俳文学会々員、俳

諧寺芭蕉舎主。連句同人誌れぎおん同人。

著者―句集、連句集、訳書等著編書多数。

住所―札幌市中央区北六条西二十三丁目

いしかり曆第十一号

— 清雅帖 石狩尚古社連句集 —

解説 前川道寛

校注 窪田 薫、田中 實

発行 石狩町郷土研究会

発行日 平成八年三月三十日

限定 三百部